都市空間の原初形態

―山岳寺院の構造と広場性―

小林忠雄

一　都市と広場―問題の所在―
二　山岳寺院にみる都市空間の原像
三　もう一つの高野山―能登石動山―
四　山地都市の性格
五　「尾山」と称した金沢の山地都市的コスモロジー
六　若干の考察

論文要旨

本稿は都市空間の広場に関する共同研究の一つとして、山岳寺院都市を対象に、日本の都市空間の原初形態を抽出したものである。その基本的な山岳寺院都市とは高野山であり、この山中における不思議な空間構成を分析してみると、いわゆる伽藍などが集中する宗教施設ゾーン、院や坊舎など宗教者が居住し、その生活を支える庶民によってつくられたマチ域の日常生活ゾーン、そして高野山が霊山である所以ともなっている墓所の霊園ゾーンの三つの空間（ゾーニング）があることを指摘した。盛時には約二万人を擁した、この密教寺院の都市には、今日で言うところの都市性の要因がいくつも見られる。まず、僧侶とその生活を支える商人や職人と、常時、多くの参詣者を集めていることによって、旅行者を絶えず抱えており、滞留人口がかなりの数にのぼること。次に、密教というか修験道文化がもつところの技術ストックがあり、古代中世の先端技術を推進してきた場であること。それは社会的施設である上下水道設備などにも反映している。さらに参詣者のための名所、旧跡などの見学施設やその他の遊興施設、仕掛けが充実しており、そこには非日常的な色彩表現があって刺激的であること。そして、出入りが激しいことから情報集積の場としても、この山地都市が機能していることなどの都市性を見出すことができる。

このような高野山の空間構造と類似の山地都市として、能登の石動山をはじめ、北九州の英彦山や越前の平泉寺などがあげられる。そして、ここでいう山地都市構造は、近世初頭の城下町にも、ゾーニングを踏襲した形跡が見られる。柳田國男は「魂の行くへ」のなかで、江戸の人々が盆に高灯篭をかかげて祖霊を呼び寄せた習俗にちなみ、そこには山を出自とする都市民の精神構造、すなわち山中他界観について触れている。従って、山地都市は近世以降の各地の都市構造の原点として位置づけることができるのではなかろうか。

一　都市と広場—問題の所在—

柳田國男は「魂の行くへ」という論文のなかで、いわゆる盆に精霊を迎える都市の人々の高灯篭の火の習俗に関して、次のような内容のことを述べている。

「この盆の習俗は、以前は江戸の町に盛んに行われ、それから諸国に広まったもので、先祖の霊が夜空を飛び、ここが故郷の家のあたりなることを知らせる方便のように解せられている。ここで考えてよいことは、今日の人の居住地が、段々と山から離れてきたこと、そして都市と工場地の大部分、即ち人口の最も多い区域は、すべて近世の初頭に海から拾い上げた陸地で、そこにはもう入会山も断念しなければならぬように、死んで行くべき嶺々も遙かに隔てられており、人が空中から祖霊の訪ひ寄ることを信じ得なかったならば、たちまち我々の永遠は解しがたくなるのであった。いわゆる高灯篭文化はこの点に意義がある。そして日本人の来世観が、恥ずかしいほども紛乱している原因は、主としてここにあると見てよい。」(1)

すなわち、江戸以降に発展した日本の都市は、山地を出自とする人々が多く居住する所となり、そんな山の人々が自分たちの故郷の奥山を臨み、盆に先祖の霊魂を招くため庭の高い松の木などに目印となる高灯篭を掛けるのだといい、同時に都市を中心とした人々の来世観も次第に変化し、自分たちのつごうのよい解釈が行われ始めたというのである。

ちなみに、明治に入り日本の近代的な都市化現象が始まると、それと比例するかのように、さらに山地社会の過疎化が著しく進展し始めたことは記憶に新しい。

それは、柳田國男の『山の人生』の著作で示された、いくつかの悲劇に象徴されるように、これは日本の山村社会の大半が、近代の資本主義経済社会に適応できず、最も弱体な体質をいみじくも露呈した結果であり、逆に山の人々が元来もっていた内在的な資本主義的思考によって、彼らがさっさと山に見切りをつけたからであるともいえる。

もともと「都市」はマチを肥大したものであり、諸国大名とその家臣が居住して形成された城下町や、大きな寺社を中心とした寺内町あるいは門前町、交通の要衝である港町や宿場町などのマチを基盤にして、民衆が大勢集住するようになり、その構成体がより複雑化し、より多様な社会がつくられたものである。

これまで民俗学あるいは歴史学では、このような「都市」を規定していく機能とか、都市性について、いくつかの現象や要素を抽出してきた。しかし、それは十分に比較検証してきたわけではない。例えば「都市における広場」といった、主として西洋社会におけるある種の社会的機能の場としてのパブリック空間について言及してみると、果たして日本には本来、これと同質の「広場」という社会的に認知された空間があったのだろうかといった疑問さえ浮かんでくる。

すなわち、日本の人文科学における「都市」という概念そのものが、どこか西洋のある種の概念に依拠してきたところが多く、日本の都市性

あるいはその特質をもっと明確にしない限り、日本の都市論の本格的な議論は進まないのではなかろうか。

特にこの「広場」という用語自体が、近代以降にもたらされた西洋史や都市工学などの概念語の訳語であることを考えれば、西洋における「広場」と日本でいうところの「辻・市・門前」といった広場的空間とにおける機能の類似性や質的違いなどは、予め考慮しておかねばならないであろう。

ちなみに「広場」は、国語辞書では「広い場所。公共的な性格をもった一定の広い場所。比喩的に意志の疎通をはかることのできるような共通の場。」と記されている。(2)

もともと広場はギリシャ・ローマに端を発し、ヨーロッパの古代・中世都市における多目的で公共性のある広い場所空間の呼称のように解せられる。

例えばドイツの古い都市のように、狭い道の両脇に密集した人家の建物が数多く立ち並び、そんな細い道を抜けると突然、市庁舎（ラートハウス）や教会堂（カテドラル）のような都市のモニュメントとなる建造物を前にして、見通しのよい大きな広場空間が出現するといった光景はよく知られている。

ヨーロッパの広場には人々の生活と密着した歴史があり、そこでは自治体の告示や政治的な演説、討論、集会などが行われ、また祭りなどの催物があったり、ときにはみせしめのための死刑場に使われるかと思えば、人々の憩いの場所となるなど多種多様な機能をもっている。いわば、都市の中心ともいえるシンボリカルな空間である。

このような、ヨーロッパ的な広場の概念を、日本の都市に当てはめた場合、同様の空間が果たしてあるのだろうかという議論はこれまで何度か問題とされてきた。

筆者の場合、これまで日本の歴史都市、例えば旧城下町に関心をもち、その空間論というかトポロジーといった視点で、いくつかの都市を対象に調査研究を行ってきた。

そこで、歴史都市におけるいわゆる広場的な機能をもった場所空間として、どんなものがあるのかをみると、例えば、北陸の城下町金沢では、俗にヒロミ（広見）と呼称される辻を拡大した空間がある。これは市街地の通りが交差する辻を広げたもので、藩政期から既にあったものと、明治以降に武士の住む屋敷町が解体し、新たな市街地が生まれた折りに設置されたものとがあって、いわゆる金沢の人々にとって、多少でも辻が道幅より広めにとってある場所を総称して言うものである。

金沢の市中を流れる犀川を挟んだ左岸には、旧街道である北陸道の城下町入り口にあたる六斗林町があり、そこには加賀藩ゆかりの玉泉院と泉野八幡宮があって、その門前の広場は古くから「六斗のヒロミ」と称されてきた。

ここはかつて藩政期に、幕府の巡見使を迎える場所とされ、きわめて政治色の強い儀礼的空間であり、軍事的にも重要な場所であったが、後には市中の火事で類焼を防ぐための防火区画的な空間機能が重視され、消防ポンプ小屋や火の見櫓が設置されたりして、この付近の都市防災の

拠点となった。

このように、ヒロミは近代に近づくに従って、全体的に都市防災上の区画的機能をもった空間としての性格が強まり、明治以降はマチの盆踊りなどの場所として、あるいは市祭のときの行列や出し物の集合場所といった使われ方もあったが、基本的には道路とし位置づけられてきた。

ちなみに、この金沢のヒロミと同じような空間は熊本城下にもあり、ここではヒロキと称されていた。(3)

他に金沢城下には、ヒロミとよく似たマスガタ（升型）と呼ばれる空間もあり、これも近世初頭の城下町造りの際、兵の隊列を整える場所であったり、外敵の侵入から守るための防衛空間であったと伝えられている。

金沢では各マチごとに神社はなく、従って祭礼時には神輿の渡御といった行事が無い代わりに大きな頭を振る獅子舞芸能があって、ヒロミやマスガタ、ツジといったこのようなやや広い空間は、獅子舞を演じる恰好の場所であり、臨時の祭礼場であった。

また、金沢では藩政期に藩主が国帰りをしたり、世継ぎが誕生したり、藩主が交替したときなどには、城下の人々がこぞって祝う「盆正月」という名の臨時祭礼が行われた。その場合、各マチからは獅子舞とか造り物の山車などが出されて城下町内を練り歩き、最後に城内における「物見」と称された場所の下にそれらは集合し、藩主に拝謁したもので、そこには広場らしい臨時の謁見場が設置されたという。(4)

いずれにしろ藩政期には、人が大勢集まる場所は極力避けられ、常に寺社奉行が目を光らせていた政策がとられていたようで、従って、城下町内では、多少とも広くなった道の一画を使った、短時間のイベント的な行事を許可する程度であって、基本的には広場と呼べるような恒常的な自由空間というものは無かったと考えられる。(5)

総じて城下町の場合は、城を防御する外惣構堀として大河を利用している所が多いが、そのような大河には橋が一本架けられるのみで、その橋の袂には道を拡大した広場らしき空間が設けられている。すなわち、橋の袂には道路を遮断する木戸があり、そこには木戸番が常時いて、夜になるとこの木戸を閉じ、夜間の通行を規制していた。

このような木戸は近世初期には城防衛のための施設であったが、世の中が次第に平穏になると、いわゆる城下の人々の支配を目的とした、いわゆる「マチに締まりをつける」ための施設であったと言われている。(6)

ちなみに、近世の各地の城下町絵図などに目を通すと、大概は橋の袂の木戸前の広場空間は高札場とされ、藩や幕府の様々なお触れを告示する場所とされている。(7)

金沢城下では犀川大橋、浅野川大橋の袂にそれらしい光景があり、信州の松本城下でも女鳥羽川に架かる千歳橋の袂では、道が鍵の手に曲がってつくられていて、マスガタに似た広場らしき場所が今日でも残っている。

また、これも恒常的な広場とは言えないが、以前は市中を流れる大河の川原や中州には芝居小屋が立ち、現在でもマチのイベント場に使われたりして、性格的には臨時の広場機能を有している。

そもそも日本の城下町というのは近世以降に発達したものが多く、中世におけるまったく戦闘とその防衛を意図した山城とは異なって、領主は山地から出て、多少とも平地に近づき、むしろその館は領地を統治しやすい場所が選ばれ、また交通や流通の中心ともなるような地勢の場所に館を置いて、マチを形成してきた。[8]

従って、例え平城であっても、もともと城郭の構造は基本的には山城を模したものであり、山城の機能を崩さずに築城することが本義とされてきた。

筆者の場合、以前から注目してきたのは、城を「おやま（御山）」と呼び、城下町を「さんげ（山下）」と呼ぶ地方が多いこと。例えば金沢城下の場合、金沢そのものをオヤマと称していて「尾山」の字をあてている。これは日本の仏教寺院の性格と同じであり、寺院には必ず山号が付けられていて、またそれらの本山寺院を「御山」と称してきたことも、ここでは関係しているように考えられ、かつて古代・中世の城と寺院との間には、その建造精神の底流において、同一の思想があったのではなかったかと推察される。

従って、ここには日本の都市発生の原理として、中国の唐の都を模したという平城京やその他の古代の都城、その後に展開された平安京のような大陸的影響をうけて形成された都市形体とは別に、日本的なオリジナルな都市空間の原像とも言うべきプランを、中世の既に形を失った山岳寺院およびその寺内町と、初期の城下町の形勢過程に見出し、その背景にある山地的思考ないしそこから派生して出てきた広場観のようなものを検証する必要があるように考えられる。以下は、そのような問題の所在に沿って、とりあえず私見を述べてみよう。

二　山岳寺院にみる都市空間の原像

そもそも都市と言えば、どのような条件および性格を指しているのだろうか。

筆者の場合は、次のような都市性を想定している。

まず第一に、その地域の権力者の館、或いは何らかの権力中枢機関（宗教における権門組織を含む）の建物があって、シンボリックに存在する。

第二に、土地の生産に直接関わらない人々の居住地とも言える。また約五〇〇棟以上の個別の建物が集合している生活地域であること。さらに、借家が多く、地域内部での移動が激しい。

第三に、数多くの居住人口を支えるために必要な社会的設備、例えば上下水道設備や集会所などの公共建物が整っていること。

第四に、食品や衣類や履物などの商品市場、生活必需品を製作する多種類の職人工房などがあって、商品経済社会が発達しており、社会全体が基本的には資本主義的であること。

第五に、交通などの要衝に位置し、絶えず旅行者や交易・運送業者の出入りが激しく、宿駅の施設が整っていること。

第六に、時代の先端を行く新しい情報（先端技術や商品情報など）を良しとする風潮があり、いかなる種類の情報にも敏感であること。さら

に、ファッションに鋭敏であって、人工的色彩がマチ域内部に充満し、絶えず人々を刺激していること。

第七に、一つの宗教寺院だけでなく多宗派の宗教施設が寄り集まってあり、それにともなって名所や見物の対象となる装置を多く有し、また遊興施設などがあって、人々を常時享受させる環境をつくっていること。

第八に、自ら周辺地域の人々と区別し、都市住民意識が強く、都市のアイデンティティーを強調する風潮があること。

その他にも様々な条件が考えられるが、ここではとりあえず八つの用件をあげておこう。すなわち、民族国家や時代を越えた文化人類学的な視点によれば、これらの性格をもったマチ域こそが、都市性を帯びたマチであることを示しているように思う。

民族学者である川喜田二郎の『ヒマラヤ・チベット・日本』という著書のなかでは、ネパール盆地の都市国家について触れられている。

それによると、ヒマラヤの諸盆地における都市の発生はA.D.4Cにまで遡ることができ、それは古代のギリシャ・ローマ時代にもあったいくつかの都市国家と呼べる性格のものであるという。例えば、ネパールの首都カトマンズの場合、これが都市国家であるのは、都市の中央に王宮があり、王宮前広場があって、都市の中核部をなしている。そして、その周囲に家が集まり、細い路地や小さな広場がある。

このような都市国家は領土国家と区別されるもので、川喜田は「都市国家のなかではまだ村的な意識というか市民の連帯意識が強く、従って村的なコミュニティー意識が強い。またカトマンズの街には上水道・下水道が発達しているのも特徴的である。さらに、一つの宗教で支配されてはおらず、ヒンズー教と仏教とが混在している。そしてこの二つの既成宗教の混在の背景には、それ以前の密教文化が土台にあるからだという。そしてこれと同じ様な都市国家としては、中国雲南省の北部山岳地帯で納西（ナシ）族が住む、麗江（リージャン）盆地があげられる」としている。(9)

ここで注目されるのは高山の盆地につくられた山地都市では、村的なコミュニティー意識が強いこと、その中心となるシンボリックな空間が広場であり、また上水道・下水道の施設が発達していること、さらにヒンズー教や仏教など二つ以上の宗教が混在し、その背景に密教文化が土台にあることなどが都市国家的要素として指摘されている。

このことに関係して、中沢新一の『チベットのモーツァルト』所収の「ヌーベル・ブッディスト」という文章中で、次のような密教と都市性の問題に触れている。

「密教思想というのは、意外なことに、〝都市性〟と深い繋がりをもっている。つまり、密教には都市と資本主義（都市の本性は本来資本主義だ）を形成する運動性ときわめてよく似た運動性が内蔵されていて、両者はある地点まではほとんど同じ道を歩みながら、決定的は地点でおたがい離れ離れになったものである。もっとおおげさなことをいえば、密教的運動性には、実現された都市と資本主義のスピードを追いぬいていこうとする〝都市性〟のエッセンスのようなものが隠されているのである。・・・神聖な山に踏み込み修行する山岳密教者の行為は、平地に定住

する農村共同体の原理を根底からのりこえていこうとする〝革命性〟をはらんでいる。共同体の考え方からすれば、神聖な山はあえて足を踏み入れることのできないタブーの領域であり、他界であった。いわば、平地の共同体が意識の遊走性をせきとめ限界づけて、構造的な社会的宇宙をつくりあげようとしているのだとすれば、山は畏怖しつつも禁止されるべき多様体の領域をあらわしている。[10]」

ここでは、この中沢の記述を利用して、アジアの山地民世界のすべてを語ろうというのではないが、この川喜田が示した山地都市論および中沢の密教文化の都市性論からは、日本の密教文化のルーツともいうべき山地思想があり、そこにはどこか日本の古代中世の山岳仏教において神道と仏教を混在させたような宗教文化と共通したものを感じさせる。

しかもここでいう密教の持つ運動性には、都市性のエッセンスのようなものが隠されていて、また山岳密教者は農村共同体の原理に対抗する革命性を有しており、山が多様体の領域であるという視点は、日本の都市成立における基本的性格を分析する際の、一つの視角であるように考えられる。

そもそもわが国の密教とは何かについて、筆者は専門家ではないので充分理解している訳ではない。一説には奈良期までの初期大乗仏教の僧侶達が都心に伽藍を設けて、理論的なものの追求のみに走り、行的なものを忘れてしまったことの弊を指摘して、真の仏道修行の地は五台天台の如き山嶺にあるもので、むしろその頃には忘れられていた高山深嶺の地でなければならないというのが、密教寺院が山岳仏教といわれる伝統的な考え方であったとされている。[11]

さらに、五来重の説では、わが国の山岳仏教の成立は密教と陰陽道が、日本固有の山岳崇拝と結合したものという。[12]

このことに加えてもう一つ見逃せないのが、密教がそもそも大陸から伝播した際にもたらした科学工学的技術や様々な博物学的知識を保有しており、このことについて内藤正敏は霊石の「お羽黒石」やその他神仙薬、丹薬、山師などの事例から、次のように述べている。

「日本各地の修験伝承をながめると、山伏が単に怪しげな祈禱や呪いをする呪術者ではなく、高度な金属・鉱山の科学技術をもった技術者集団であった姿が浮かび上がってくる。（中略）金属・鉱物は山岳深くに埋蔵されており、修験道は山岳そのものを根拠地とする宗教集団であった。[13]」

「現在の修験道にみられる金属鉱山技術や医薬技術などの伝承や記録の痕跡は、かつて古い時代に山伏が単なる呪術者ではなく、科学を含めて総合文化の担い手だったことを示している。[14]」

このように古い時代にあって、当時の先端科学ともいうべき修験道の科学技術論については後にまた述べるとして、密教のもつこのような性格には他の仏教各派と明らかに際立った違いを見せている。

日本の代表的な密教の拠点といえば、比叡山と高野山であろう。

これは奈良時代末期の延暦四年（七八五）、最澄によって開山された天台宗本山である比叡山延暦寺と弘仁七年（八一六）、空海が自らの入定の地として選び仏都を建設しようとした真言宗本山の高野山金剛峯寺である。

比叡山は方や京都盆地を、方や琵琶湖を見下ろす見通しの良い山頂付近に造られた寺院であるのに比して、高野山は海抜千メートルもの高い山中の盆地状の野に造られた、やや閉鎖的な空間の聖地である。

樋口忠彦の『日本の景観』による景観分類では、この高野山を「八葉蓮華」型景観と称しており、「高野山の周囲を取り囲む峰々が、あたかも八葉の蓮華のようであることから、空海は、これらを八葉の蓮台になぞらえ、外の八峰、内の八峰と称し、その蓮台の中心に大日如来を示す大塔を建て、全山を八葉九尊の曼陀羅と見たのであり、これを八葉蓮華型景観という、洗練された聖なる景観の典型を生み出した」と述べている。[15]

また、先述の五来重は、高野山は本来、山麓の民の祖霊の鎮まりとどまる山、すなわち神奈備であったといい、また山林修行である修験道の場所であると性格づけている。

さらに高野山の鎮守神である丹生津比売神は水分（みくまり）の山神であることから、水源信仰につながり、高野山全体を潤す上水道と関係しているとも述べている。

ちなみに、この丹生津比売神の丹はもともと水銀朱を表し、これを祀るということは水銀の鉱山を担う丹生族の足跡にもつながっているとしている。[16]

高野山山麓の上古沢には丹生津比売神社があり、この神社が谷間に位置している景観から、もともとこの付近に水銀鉱山があったことを窺わせ、それは奈良や大坂に近いところから、仏像や仏具の鍍金技術の需要に支えられていたものとも考えられる。

そして、この鍍金技術も空海が中国の唐からもたらしたものとの説があり、高野山の開発の必然性をそこに見ることができるであろう。[17]

高野山において空海が最初に根本道場として建設し、高野山全体の主要な部分を形成しているのは壇上伽藍と称されている場所である。

壇上とは真言密教の中心である大日如来を安置する大塔の鎮まる壇の意味であるといわれ、この大塔を中心に様々な諸堂宇が配置されている。

ちなみに伽藍の配置は大塔を中心にすると、その前には本来講堂と称されていた金堂があり、大塔の右側の並びには愛染堂、大会堂、三味堂、東塔が、左側の並びには往時あった講堂（もとは御願堂と称され、後には金堂と称される）、そして御影堂（もとは念誦堂と称される）、准胝堂、孔雀堂、西塔があって、さらに金堂の左側には山王社、そして高野山全体の守護神である高野明神（狩場明神）・丹生明神の両神を祀る明神社や経蔵などが配置されている。

先述した佐和隆研の「金剛峯寺伽藍の草創」と題した論文によれば、密教寺院の伽藍配置に関して、当然山中に設けられて、しかも無制式であるのが特徴。また私寺として建立されたものが多く、最初から計画はなく変態的な発展をなす。但し金剛峯寺伽藍の場合は私寺だが、最初より雄大な構想に基づいて建立したものとしている。[18]

高野山出版社刊の『霊宝高野』の概説書によれば、これらの伽藍は弘法大師の道場すなわち最初に手がけた講堂建立後に順次建てられ、またその後七回もの落雷などによって消失しては再建するといったことを繰り返しているとしているので、当初から明確な伽藍配置プランがあった

かについては明確でない。

そして、このような無制式プランの意味を仮に想定したとするならば、密教が当初からもっている、既に奈良で理論的に形式化しつつあった大乗仏教の各寺院へのアンチテーゼ、すなわち真の仏教修行の場は山岳にありといった自然体への意識に基づいているともいえるであろう。

高野山は、近年のガイドブックなどには山上盆地につくられた「山上都市」といった表現がなされている。すなわち、東西五・五キロ、南北二・三キロの山内に、現在は真言宗総本山金剛峯寺をはじめ、一二三の寺院や町家、商店があり、人口は約六、〇〇〇人という高野山町を形成しているからである。そして、このマチは、町役場を中心に警察署、消防署、病院、小中学校・大学などを保有した宗教都市なのである。ちなみに江戸時代には諸国大名の庇護のもとで造られた寺院が、正保三年（一六四六）の記録では一、八六四もあり、人口も約二万人が居住していたと言われるほど隆盛をきわめたとされている。[19]

ちなみに、このマチを大きく分けると、数々の伽藍や本山寺院などがあるパブリックな宗教施設地帯、宿坊寺院および土産品などを売る商店などが立ち並ぶ日常生活地帯、弘法大師の廟のある奥の院とその周辺に墓石が約二〇万基あるといわれる霊園地帯の三つのゾーンにまとめることができるであろう。

筆者がこの高野山を訪ね散見した印象から言えば、紀の川から分け入ったまさに深山幽谷といった山中に、これほどの宗教関連施設が群をなしてあり、また奥の院の壮大な墓石群のその数の多さに圧倒された思いであることから、まず山上都市といった単純な象徴表現ではもの足りず、日本人の山中他界観を反映し、霊魂が凝縮して籠もっているような「霊山都市」といった雰囲気を漂わしているように思えた。

さらに、今日なおここでは常に全国各地から、祈禱や参詣に訪れる信仰者や観光客などの旅人を集め、そのような宿泊滞在者を加えて常時、高野山町人口の約二倍である一万余人の居留者がいることとなり、しかも同時に各地の情報を集積しそれを反映した造形文化、および様々な物見遊山に要する遊興装置や仕掛けの文化を配置した、まさに都市文化的な性格をもとから備えていたように考えられる。

従って、高野山町は根っからの住人が定住する場所ではなく、各地から多種多様な人々が寄り集まって出入りし、またそんな旅行者を受け入れるための施設や装置を、そこに住む人々が意図的に人工的に造りだし、それはいわばマチ自体が様々な人々が常に行き交い、また身分の区別なく開放された空間であって、全山が「広場」に似た性格の場所であると考えられる。

そのような意味では奈良や京都、四国の金比羅宮や長野の善光寺、千葉の成田山などといった大きな寺社の門前町、寺内町といったマチも同じ性格の場所といえるかもしれないが、高野山と違うのは高野山はあくまで山中にあって隔絶されており、意識的にしろ無意識的にしろ目的を明確にして人為的にプランニングがなされていることである。

先述した五来重は「丹生津比売神は水分（みくまり）の山神であることから、水源信仰につながり、高野山全体を潤す上水道と関係している」

と指摘しているが、修験道宗教の教義上にとって水は重要な対象物ではあるけれども、空海があえて高野山を選んだ理由の一つには水分地すなわち水源地が側にあるという条件が必要であったからと考えられる。

すなわち、空海ははじめから防御的にも有利な八葉蓮華の山上盆地に、自らの宗教思想に基づいた宗教都市というか、古代のヒマラヤ山系に展開したカトマンズのような都市国家のようなものを想定していたのではなかろうか。

空海が唐から学んだ技術には溜池をつくる土木技術などがあり、全国に弘法池といった伝説が付随した溜池のあることはつとに有名であるが、高野山開発にも当初から上水道設備を意図した形跡があると五来重が指摘していることは、カトマンズでも早くから上下水道が完備していた点を考慮すると、それは今日でいう都市工学的な意味からも重要な都市的要素になりうると考えられる。

また、空海が広めた真言密教には一般衆生が理解し易いように仏画・仏像による色や形を重視しており、そのような考え方は密教文化の代表といわれる曼陀羅においてよく表わされている。その場合、この曼陀羅の中心は太陽を意味する大日如来で、それは透明な白色で象徴され清浄・息災を意味する。また怒りを表す阿閦如来は青で知恵・調伏を意味し、宝生如来は黄で財宝・増益を意味するという。阿弥陀如来は愛や情熱の色である赤で象徴され、慈悲・敬愛を意味し、不空成就如来は黒（緑）で、これは作業を意味する。

その他に密教では、結界するために、大壇上の四辺に壇線という五色の糸を張りめぐらし、これは青・黄・赤・白・黒の五色とされていて、曼陀羅の境界となる五色界道にも用いられている。[20]

ちなみに壇上伽藍にある両明神社の堂宇は、丹生津比売神の象徴色でもある色鮮やかな朱色で塗られ、その他の大塔を含めた伽藍の各堂宇にも、この朱色（丹色）が塗られていて周囲の緑の樹立に生えて際立って見える。

八世紀の古代インドに発した密教文化は、ヒマラヤ各地の都市に今日でも残されており、色彩文化を都市的なものとするならば、そこには都市における密教的な色彩象徴をみることができる。

例えば、チベットの場合、ポタラ宮では国家元首であり宗教の首長でもあるダライラマの住居とされる建物は「白宮」と称され、儀式や祭祀場に使われる建物は「紅宮」と称されている。また「五代」と称する宗教上の色彩曼陀羅ではチベットの自然観を反映して、黄色は大地を、青色は湖あるいは天上の空を、赤色は燃える火を、緑色は青い草原を、白色は雲あるいは天空をそれぞれ象徴しているといわれている。そして、神がいる聖地を表すタルチョにはこの五色の小旗をたてて表し、また様々な予言や吉凶占いには色砂を使って行う砂曼陀羅があるのも特徴的である。

もともと日本の仏教文化にも五彩色文化があり、寺院の建築彩色をはじめ儀礼用具などに様々な形での五彩色が表出していて、その影響下にある民俗の場においても、これはハレ（晴れ）を象徴する色彩としてこれまで認識されてきた。例えば北陸の城下町である金沢の結婚式に使わ

れる五色生菓子は、日月山海里の森羅万象を象徴する赤・白・黄・青・黒を意味する菓子であり、人生儀礼としてのハレ感覚を表している。[21]

いずれにしろ高野山は真言密教を背景としたきわめて特異な山地都市であるが、空海が最初に手がけた建物は講堂（平安中期以後に金堂とよばれる）であり、これは一山の根本道場であって、大日如来を表す大塔とともに高野山全体のプランの中心をなしている。

ちなみに、近世初期に描かれた兵庫県赤穂市の花岳寺本と呼ばれる高野山参詣曼陀羅絵図は二幅仕立てのもので、一幅は金堂を中心に天野社、二つ鳥居、大門、空海がこの地を選んだ伝説にちなむ三鈷松、御影堂、高野・丹生の明神社などが描かれていて、どちらかと言えば神道的というか開山伝承を主とした構図のものであるのに対して、他の一幅は大塔を中心に文殊塔、薬師堂、玉川、頼截地蔵、木食上人廟、無明橋、手向所、灯篭塔、御廟といった奥の院に向かう仏教的色彩の濃い構図のものであり、高野山のコスモロジーの二面性をこの曼陀羅図はよく表している。（図1参照）[22]

そして、壇上伽藍にある諸堂宇の建物の配置を見る限り、この講堂を中心にしてその周囲に諸種の堂宇があるもので、仮にこの講堂を取り去ったならば、そこには大きな広場が出現することになる。現在ある金堂では山内の大法会や重要な法会が営まれているという点からも、ここは一山全体に関わる宗教儀礼の空間であり、一山の宗教者全員が集まる議決場所でもあった。

これについて五来重は、山岳寺院の発祥は講堂からであり、これはも

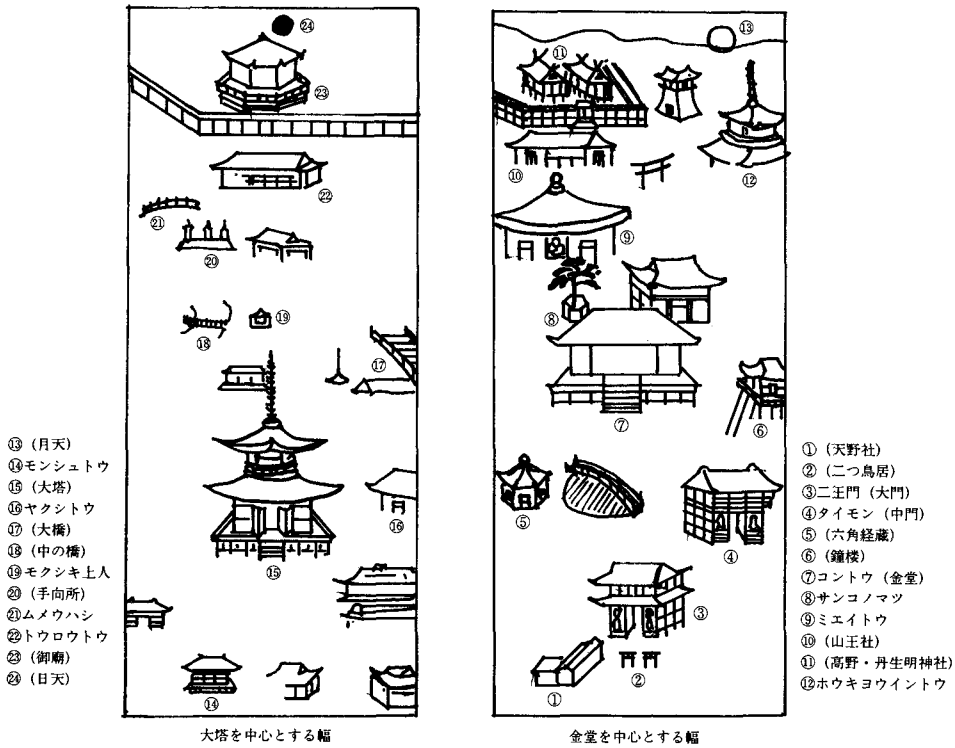

図1　高野山参詣曼陀羅（花岳寺蔵）
〔下記名称は日野西真定「高野山参詣曼陀羅の研究」によった〕

ともと山神への拝殿であって山徒の集会所であったところから、巨大な建築物が必要とされた。そして本堂は山神の社殿であって本地堂であるといった内容のことを記述している。[23]

そもそも日本という国は、山が多く森林に囲まれていて、しかも四季があり降雨や降雪による気候の変化が激しいところから、ヨーロッパの地中海地方のような乾燥した環境のなかから生み出された広場と違って、人々が集会を開くためには何らかの雨露を防ぐ施設が最初から意図されてきたものであろう。それは、例えば比較的に雨や雪の多い北陸や上信越地方、東北地方にかけて分布する縄文時代中期の集落遺跡に、巨大な半円柱（栗材の木柱痕）で構造的に組み立てられた集会所というか祭祀場、あるいは作業場と目される建物があったことからも、その風土的に制約されているために造らざるを得なかった、屋根のある広場の構築が求められ、屋内的広場観というものが、かなり古くから基本的にあったのではなかろうか。[24]

しかも、後の弥生時代の農耕文化社会と異なって、縄文時代における集落の立地条件は、その主たる生産の場が山中に求められていたのであり、山地における技術的展開とそれを反映した社会構造（農耕栽培社会とは異なった採取加工技術社会）は、より山地民的で不安定な生活社会環境とみることができよう。

このことを念頭に置いて考えてみると、高野山における講堂のような存在は、単なる仏教寺院の宗教施設というよりは、山地都市的社会（山岳都市国家）を構築していく上で、ある意味では縄文時代から継承されてきた山地民的生活原理によってイメージされた、独自の広場観を反映した建物と見ることはできないであろうか。

三　もう一つの高野山—能登石動山—

能登半島の中央部、石川県と富山県の県境付近にある標高五六五メートルの石動山大御前は、古くから周囲の漁民や農民の信仰を集め、それを神体とする神社があって、それ自体は既に一〇世紀につくられた『延喜式』の神名帳に記載されており、能登の官社四三座の一つである「伊須流岐比古神社」に比定される宗教施設であった。

そして、おそらくは鎌倉時代頃から真言系の修験道者らによって、この山頂付近の比較的緩斜面の平地に山岳寺院としての伽藍堂宇が造営され、石動寺の名で多くの信者を集めたものであろう。

山名の石動山は、古くは「いするぎやま」あるいは「ゆするぎやま」と称されたが、これは本来この辺りの地形、地質からくる「石—礫—の動く山」の意味であって、後に道教系の星辰信仰や修験道の影響を受け、天から降ったという動字石の伝説が付加したものと考えられている。

ちなみに、『石動山古縁起』によれば、崇神天皇の六年に方道仙人によって開山され、中興の祖である智徳上人が養老元年（七一七）に登山し、大礼殿（講堂）を、天平勝宝八歳（七五六）に造営したもので、また石道山の本地仏である虚空蔵菩薩を、勅使である藤原家通によって示現したのは天平宝字元年（七五七）としている。

しかし近世初期に書き改められた『新縁起』では、白山を開山した越の大徳と呼ばれた泰澄が白山に続いて石動山にも登り、仏神の世界を構築したと記していて、二つの縁起には大きな違いがあるが、これを分析した浅香年木によれば、『新縁起』が林羅山によって書かれた近世初期の石動山において、『古縁起』の主張とは別に、泰澄開創の伝承が現実に生き続けていたのであろうと推察されている。[25]

このように鎌倉時代から順調に発展し隆盛を誇った石動山は、別当大宮坊を中心とする坊舎三六〇余坊、衆徒三〇〇〇人を擁する一大山岳寺院であった。

その後、南北朝の内乱を描いた『太平記』によれば、建武二年（一三三五）に石動山衆徒は越中国司中院少将定清とともに後醍醐天皇方についたため叛乱軍の攻撃を受け、この最初の石動山合戦によって一山はことごとく焼かれたという。

そして炎上後の石動山は、室町将軍家の支援を受けて堂塔などが再建され、新たに京都の真言宗勧修寺の末寺となって、名称も石動寺から天平寺と改称されたらしい。

しかし、天正一〇年（一五八二）には能登の土豪で越後の上杉家に逃げていた温井景隆らが石動山衆徒と結んで、石動山の峰つづきの荒山砦に立て籠もり、当時織田信長の家臣であった前田利家と佐久間盛政の軍と戦って陥落し、この二度目の石動山合戦によって石動山の堂塔伽藍は再び灰燼に帰したといわれている。

慶長二年（一五九七）、前田利家は石動山天平寺の僧たちがもとの寺地に帰ることを許可し、さらには利家の妻である芳春院や三代目藩主の前田利常、五代目藩主である前田綱紀の庇護のもとで逐次再興された。また、明和九年（一七七二）には後桃園天皇の勅願所となり、七か国知識米勧財が公認されて、そこで集めた米は二万石余までになったという。

ちなみに、還往が許された七二坊を主に復興した石動山は、天明六年（一七八六）の記録では、石動山内の五社権現・講堂・五重塔・神輿堂・経蔵などの諸堂宇を二一数えたとされている。しかし、明治初年の神仏分離の命令が出されると、それまでの寺坊は勢力を失って瓦解せられ、坊の大半は里に下り、僅かに数軒の坊舎がのこって、明治八年（一八七五）頃に白山麓から入植した人々とともに農耕を営むようになったという。[26]

以上が山岳寺院である石動山の主な歴史的経過であるが、ここで注目したいのは描かれた年代は不明ながら室町期の石動山の堂塔伽藍の様子を伝える唯一の『石動山境内古絵図』が現存していることである。

これは縦一五五センチ、横二〇二センチの紙本に著色されたもので、中央の左右に大きな龍頭をいただいた幟旗のある本堂（講堂）が、向かって下隅に仁王門、その右に玉橋、伝説の動字石が、その下には中央院があるいは大宮坊らしき土塀に囲まれた坊舎が、その右には高床の大堂があり、本堂の右下から上部にかけては鐘楼、雨乞い池で著名な伝説を有する鰯が池、茅葺きの峯入堂、大師堂、五重塔、開山堂が描かれ、また本堂の背後には多宝塔、梅宮があってその本堂の左側に火宮、剣宮が、上部には伊須流岐権現の本殿が大きく描かれている。さらに注意される

のは画面の右下隅にマチ並が描かれていることである。

この古絵図はいわゆる石動山参詣曼陀羅の性格をもつもので、鹿島町教育委員会が製作した「史跡石動山」平面図に記された遺跡地図と照合しても、ほぼ諸堂宇の配置や参詣順序においては逸脱していないので、盛時の伽藍配置構造を知る上において貴重な資料である。（図2・3を参照）[27]

この絵図から読み取れるのは、この伽藍配置および様々な諸堂宇の装置の組合せというか宗教性を踏まえたコスモロジーがあまりにも高野山のそれに類似しているのである。

すなわち、まず伽藍の配置は佐和隆研がいうところの無制式なプランニングであり、その意味でも密教的であること。

次に講堂と目されている本堂が一山の中心であり、そして大御前の山頂に向かう高い丘陵地に数々の伽藍が建造されていて、これは高野山の壇上伽藍と同じ発想であること。

そして、この閉鎖的な寺院空間をいくつかの性格ゾーンに分けると、伽藍のある宗教施設ゾーンとこの古絵図の最下部にほんの少し描かれている院坊や町並のある日常生活ゾーン、そして同じく古絵図の右端に僅かに表現されている木製卒塔婆に象徴される墓所や、この絵図には表現されていないが右側には御廟山と称した泰澄大師あるいは智徳上人と目されている墓所があり、いわゆる霊園ゾーンがあって、この三つのゾーンの配列も高野山のそれときわめてよく似ている。（図4参照）

また伽藍の細かな配置においても、講堂の背後には高野山の大塔と建

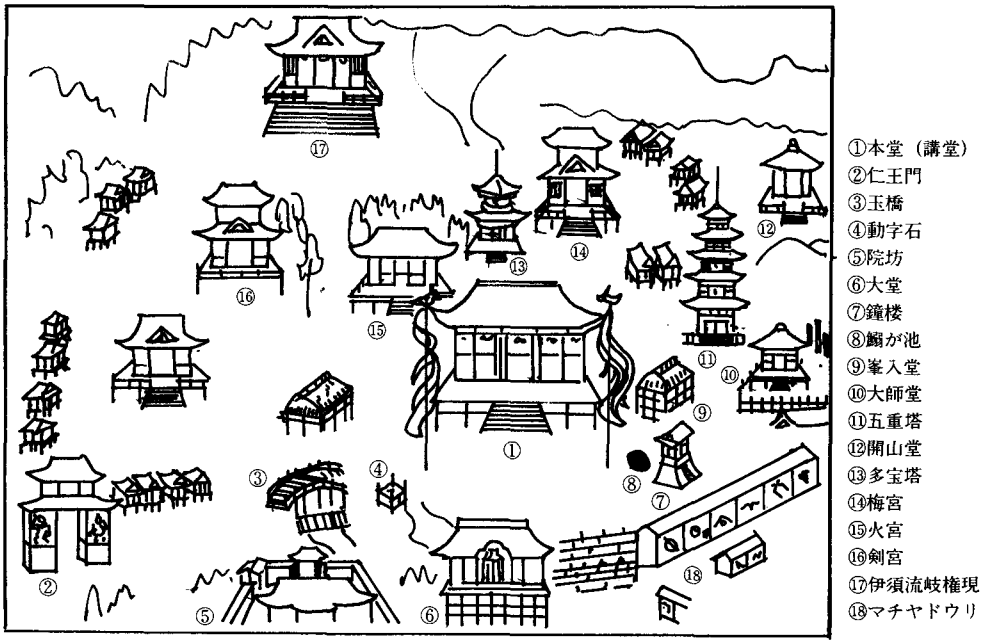

図2　石動山山内古絵図
〔建物名称は『鹿島町史・石動山資料編』によった〕

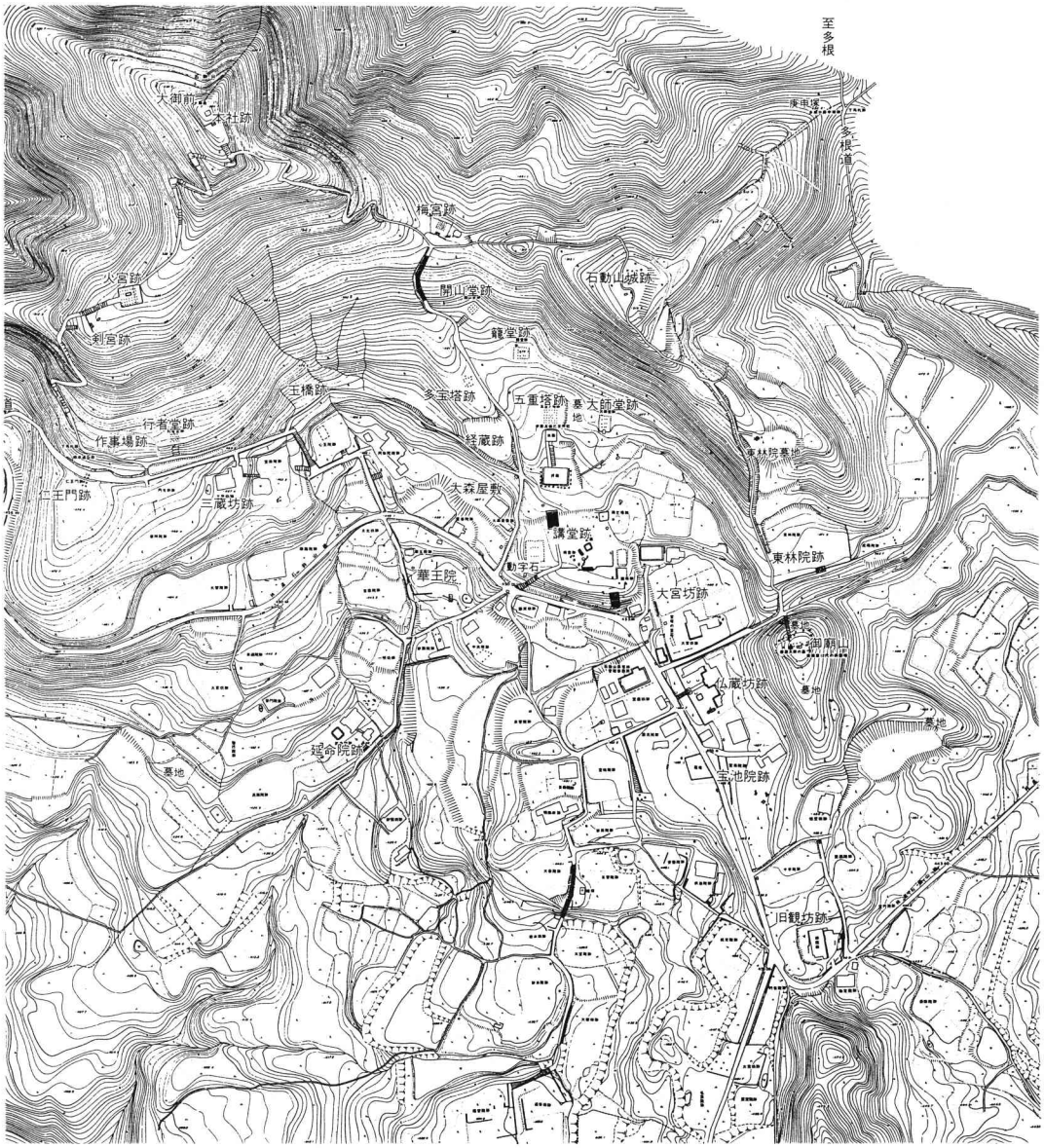

図3　石動山平面図（『鹿島町史・石動山資料編』添付資料によった）

築的にはまったく同じ様式の多宝塔があり、左側上部に高野・丹生の両明神社があるのと同じく、ここには伊須流岐権現の本殿をはじめとする五社権現の各宮が描かれており、さらに慶安二年（一六四九）に登録された施設の記録には、御影堂などもあって高野山ときわめてよく似た宗教的コスモロジーを展開している。

そして、講堂である本堂は一山のあらゆる法会や集会を行う場所であり、この場所の位置を考慮すると、それはまさに広場的な性格を有していた。

ちなみに、筆者は昭和四六年の七月七日に行われた石動山の開山祭を調査する機会があった。その行事を見る限り、この伊須流岐比古神社のかつての講堂と目される拝殿に集まった山麓の人々は多彩であり、農民をはじめ漁民、職人、商人といった顔触れであった。そして、ここでは開山祭と同時に除蝗祭の神事を行っていて、その全体の雰囲気から往時の祭りの様子を窺い知ることができるのである。(28)

このような石動山信仰の背景を考えてみると、石動山はもともと在地の神であり、大御前の山頂が突き出ているため、海岸および沖合から見ると、特に目立つ形体の山であることから広く漁民の信仰を集めていた。さらに、山麓の水田の水を潤す水源の山、すなわち水分（みくまり）の信仰が古くから山麓周辺の農民の間にあったものと考えられる。

そのことを端的に示しているのは、講堂の側の清水が湧き出る鰯が池である。これは日照りが続いたときの雨乞い祈禱の池としても知られ、ちなみに富山湾に浮かぶ虻が島の古井戸から龍が飛び出し、空を飛んで

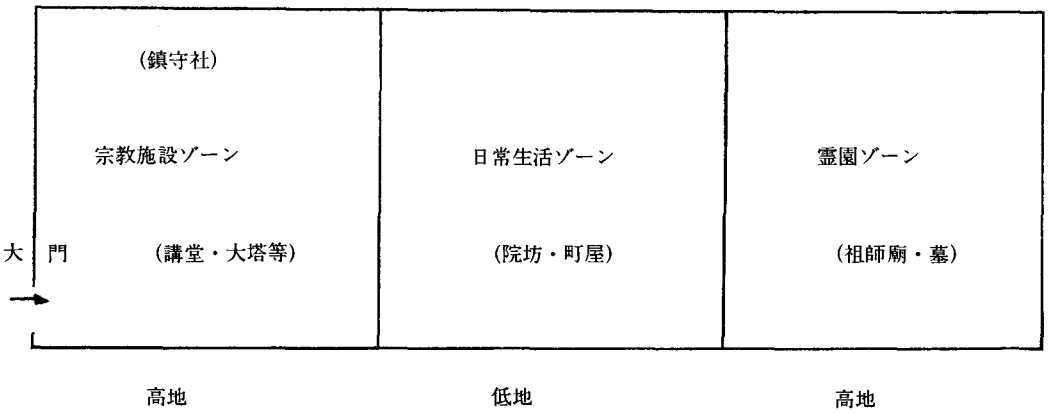

図4　山岳寺院都市（山地都市）の構造

この池に飛び込んだとき、龍の鱗の間から鰯がこぼれ落ちたとの伝説が語られてきた。すなわち、水神でもある龍神をともなった水分信仰がこの石動山には基本的にあり、同時に農業神として里人の信仰を多く集めていた。[29]

また、石動山は漆の産地としても知られ、仏教施設を創設するために必要だったのであろうか、往時にはかなりの数の漆職人がいた形跡がある。山麓の鹿島町二宮の伝承では、この石動山中にいた漆器職人の一部が能登半島先端部の輪島に移動し、現在の輪島塗りの元祖となったという話も聴取された。そして、これを裏付けるかのように石動山信仰の中心である大宮大権現はイザナギ神であると同時に本地仏は虚空蔵菩薩であり、職人の神として多くの信仰を集めていたものである。[30]

石動山の最大の行事は、三月二四日の梅宮祭で、明治の神仏分離以前までは、まだその行事が残っていた。旧延命院の末裔である西尾さと(明治三〇年生)さんの伝承によれば、この祭りは俗にタカヤママツリと称していて、その日、各坊と関係の深い信者が全国から集まり、周りの院や坊に宿泊し、祭りの酒肴の歓待を受けた後、講堂の前につくられた築山(人形山)を見物に行くのが慣例であった。この人形山は天平寺(講堂)の前の大きな松の樹の根本につくられた標山(しめやま)であって、石動山では廃絶したが、富山県の二上山射水神社の祭礼と、同じく新湊市の放生津八幡神社のそれが今日でも残されていて、同じ形式のものだったらしく、放生津ではこの三社の山を評して「石動山はクチナシ、二上山はテナシ、放生津はアシナシのご神体である」と伝承していた。

すなわち、石動山の講堂の前の空間は、一山の祭礼行事の中心であった。[31]

従って、この山岳寺院の講堂には、周辺の山麓の多種多様な職種の人々が年に何回かの祭礼日に合わせて参集し、それぞれ様々な情報を交換し、また物資の交換なども行われていた可能性があり、ここにはきわめて広場的性格があったことを感じさせるのである。

前述したように、この石動山古絵図は、高野山の参詣曼陀羅と異なり、いくつもの商店の並んだ町屋が描かれていて、その意味でも単なる宗教施設を示した曼陀羅図よりも、実態をよりリアルに表現しているように思われる。

現在でも、この絵図にある付近は「マチヤドオリ」と伝承されていて、往時は大層賑わったことを偲ばせているが、古絵図に表現された町屋は木羽葺き屋根の長屋形式にて、いわゆる平入りの間口を均等に割り振った、様々な商いの小店を連ねている。

そしてよく見ると四幅、五幅、六幅といった布を繋ぎ、白生地や薄く青色や灰色、緑色を地色に染めた長暖簾が下げられており、その暖簾の表には何らかの文様のような、おそらく店の職種を示していると見られる記号や店印が表わされている。

ちなみに、これらの文様、記号を検討してみると次のような職種が考えられる。まず蔵の鍵を描いた鍵屋、鈴を二個あしらった鈴屋、雁の文様のような印の蝶番屋、?マークを二個並べた自在鍵屋(のように見える)、また山に丸の印を描いているのは屋号のようでもあり不明だが、衣類などを売る呉服商のように感じられる。また木の葉が一枚描かれた店

は境内入り口に最も近い場所にあって、高野山では現在でも仏前あるいは墓前の供花に使われる高野槙（まき）の枝葉が露店で売られているところから、これも潤葉常緑樹のような仏前の供花を売る店のように推察される。

そして強いて言えば、このマチ並表現を見るかぎり、全体に仏具を主とした金属加工の職種が多いように見られ、ここでは密教系寺院がもつ金属技術の集積を示した門前町の特徴を表しているのではなかろうか。

この町屋の図とは別に石動山の重要な商品というか産物に薬があげられる。

高野山では今日でも、弘法大師が唐から伝えたという「陀羅尼助」と呼ばれる胃腸薬が売られているが、漢方薬の製法技術はまさに密教がもつ代表的な秘術である。

石動山においても、石動坊主（いするぎぼうず）あるいは石動山法師（いするぎやまほうし）と呼ばれた僧侶が知識米徴発の折りには、ただ米を徴収して恐れられたのではなく、実際には死者の供養をしたり、納経札や護符を与えたり、祈禱を行ったり、また石動山特産の「一本薬」を施したりしたもので、伝承では薬草の黄蓮を煮つめた「五霊膏」と称する薬なども製造していたという。他に加減四除湯、和中散、退仙散という秘伝薬なども知られており、これらによって修験道文化の奥深さを窺い知ることができる。

また、石動山では先述したように毎年三月二四日が祭礼日であり、この日にかぎって女人禁制が解かれ、各坊には坊主が関係した諸国の老若男女の信者が大勢訪れて宿泊し、境内の築山を見物したりして賑わったと伝えられ、高野山的な物見遊山の装置や仕掛けが随所にあったものと推察される。(32)

このことは、高野山の明神社をはじめとする各伽藍が朱色に塗られていたことにも通じ、朱色という非日常的な色彩は訪れた参詣者の目を奪い、異次元の世界に入ったような錯覚を生じさせるには十分であった。ちなみに、日本人の根底にある赤色は本来死の世界の感覚および死の穢れを浄化する色彩表徴であったが、後にそれはハレの色、都市の色といったものに変化したものと見られる。(33)

そして、この石動山古絵図における各伽藍の建物の大部分が、その柱や梁、扉を朱色で描かれているのも、これが参詣曼陀羅という意図的な絵図であるにしろ、やはり相当に全山的に強調された建築意匠だったのではなかろうか。

すなわち、ここには高野山と同じく、赤色を主とした都市的な色彩文化の基本的原理のようなものを感じさせる。(34)

さらに、この石動山で特記すべきことは、一山・衆徒の火葬を一手に引き受けていた焼尾というムラが、藩政期まで存在していたことである。それは宗教都市の穢れの部分を担った専門集団だけに、機能分化を進めた社会を表わしていて、都市的性格を色濃いものにしている。

いずれにしろ、はるか人里離れた高い山中に石動寺という一大寺院を建立し、盛時には三〇〇〇人余の衆徒と多くの商人や職人をかかえ、三六〇余坊の坊舎を擁したこの山岳寺院は、中世において山岳仏教者およ

び山地民によってつくられた一つの山地都市であり、「もう一つの高野山」と呼べる性格のものと考えられる。

四　山地都市の性格

これまで高野山と石動山の二つの山地都市ともいうべき山岳寺院の構造について触れてきたが、その他の山岳地域にあって、かつて繁栄を誇り多くの人口によって占められていた寺院都市といったものについて、多少とも検証してみよう。

(一)　比叡山延暦寺

まず、最初に触れた比叡山延暦寺についてであるが、この比叡山上は三塔十六渓に分かれ、そこには九院、十六院などの大伽藍を中心として、最盛期には三〇〇〇坊の寺院を有したといわれている。

それは高野山のような世俗的施設を加えたものとは遠い、まったくの山頂付近に女人禁制の結界四至（四方）を限って、その範囲内に伽藍を設け、また坊舎を建てたもので、その意味では意図的につくられた宗教的聖地空間であった。

後に比叡山では、各尾根や渓の地勢にもとずいて建てられた堂塔や山坊の群れを三つに区分し、東塔・西塔・横川とそれぞれを称していたが、このような比叡山の三塔組織は最澄が早くから考えていた六所宝塔院の企画と深い関係があったらしく、唐の時代の「六都護符」の思想に基づいたものであるといわれている。[35]

すなわちここにも人里から隔絶した山地域に、独自の宗教的コスモロジーの構築が目指されていたことに注目されるが、比叡山の場合はあくまで寺院そのものの施設が拡充されたのであって、マチ域を含めた明確な山地都市は出現しなかった。

しかし、これらの三塔に住む、大勢の宗徒の生活を支える物資の補給基地は、山下の坂本のマチであったといわれ、この琵琶湖に面した湊町あるいは比叡山の門前町ともいうべき坂本は、室町期に約二万人の人口を擁し、たいそう賑わったとされている。

この坂本には、三塔の総里坊と呼ばれる止観院（東塔）、生源寺（西塔）、弘法寺（横川）があって、ここでは寺領の年貢米の収納をはじめ、信者の旅篭としての役割を担い、また琵琶湖交易などが頻繁に行われていたとみられている。[36]

(二)　勝山平泉寺

次に、この比叡山と関係の深い越前、勝山にある平泉寺があげられる。

平泉寺は、泰澄によって開山したという修験道の霊山である白山の麓にあって、広く白山信仰の基地としての三馬場の一つである越前馬場の名で知られていた。そしてこの寺院は、平安中期頃から勢力を拡大し始め、平安末期の応徳元年（一〇八四）には比叡山延暦寺の末となり、天台宗に属することとなった。

平泉寺が最も勢力を誇った時代は南北朝の動乱期以降であり、越前の

朝倉氏の厚い庇護を受け、このとき広大な荘園とその中心である四八社三六堂の伽藍、そして院坊の数は三〇〇〇あるいは六〇〇〇とも目され、僧兵の数約八〇〇〇人を擁する一大寺院となった。

この平泉寺も比叡山と同じく、約一里四方の境内地を決め、これを四至内と称しており、天台系の宗教コスモロジーを示していた。

寺院の中心伽藍は講堂、拝殿、三所権現社堂、今宮、若宮、大師堂、大塔、宝堂、三ノ宮、三社ノ鐘楼といった堂宇であり、さらに多くの末社、院坊があったという。それらは『朝倉始末記』（巻八）によれば、「朱欄金台玉殿甍ヲ並テ造立シ置レ」たと表現され、ここでも朱色が特に目立った建築彩色であったことを窺わせている。

寺院はやや丘陵地に建てられ、そのやや低地には院坊をはじめ町家がひしめき建っていたようで、弓屋、矢細工、鍛冶屋、桧物師、大工、仕立屋、料理人、酒屋、味噌屋、塩屋、油屋、蠟燭屋、薪売りなど、さらに猿楽などの芸人なども住んでいたと見られている。この北陸の地に一大勢力を誇った有力寺院である平泉寺が滅亡したのは、天正二年（一五七四）であり、加賀越前の一向一揆軍によって焼かれたからであった。[37]

この平泉寺の盛衰については、前述の能登の石動山天平寺とまったくよく似ている。いずれにしろ、戦国期の動乱のなかで、いわば政争に巻き込まれたことによって、きわめて隆盛を誇った寺院都市を、一夜にしてみごとに消失している。

(三) 英彦山霊仙寺

さらに九州地方で著名な修験道の山である英彦山も同じく天台系の山伏たちによって、羽黒派と並ぶ当山山伏の一派である彦山派を形成した一大山岳寺院であった。

福岡県と大分県の両県にまたがる英彦山（ひこざん）は海抜約一二〇〇メートルの山で、中岳の山頂に上宮があり、その山腹に中・下宮を配している。

この山は既に平安期から文献に表れていて、彦山大権現が早くから全国に知られていた。また彦山は北部九州で最も高い山であり、山麓の田畑を潤す水源地であるところから、水分信仰が根強く残っていた。この彦山の開山伝説によれば、魏の国の僧善正が来日して開いたとされ、従ってもともと道教的色彩が強い山とされている。

古来から四つの渓谷に彦山一二カ寺が点在し、この天台寺院を中心に坊や庵がその周辺にあって、例えば寛政元年（一七八九）の坊中人別帳によれば坊数は二三六あったとされている。また坊よりも小規模な山伏住居である庵室は、坊よりもさらに多かったと伝えているところから、三〇〇以上あった可能性があり、よって江戸中期には約三〇〇〇人の山伏修験者がいたと目されている。

ちなみに、彦山霊仙寺の大講堂は標高七二〇メートルに位置し、比叡山延暦寺の根本中堂と同じ高さの場所にあり、また近くに坂本の名の集落や雲母坂といった地名があるところからも比叡山に模した性格が強く、

ここでは「もう一つの比叡山」とも呼べる山岳寺院を表しているともいえる。

『彦山流記』によると、鎌倉初期には大講堂の他に、山内別院として華台院、安養院、金剛院、惣寺院、教主院、阿弥陀堂、新宮宝殿、安養寺などの諸堂宇があったとされる。

また、これらの宗教施設以外に山内市中には農民の他、商人や職人が住むマチが形成されていたらしく、寛文一一年（一六七一）に小倉藩主によって、中谷地区に南北約二丁の範囲で約五〇軒（実際には三〇軒）の俗に言う「小倉町」が設置され、町奉行を置いた。

ちなみに、延宝九年（一六八一）の山内の人口は二、四二九人となっている。この頃の坊の屋敷地が約三〇〇坪以上の敷地を有したのに比して、町家の敷地は三〇坪程度の小規模なものであり、また、それらの商家は酒造屋（二軒）、油屋、両替屋、米屋、綿屋、糸屋、醤油屋、魚屋、八百屋、雑貨屋、風呂屋などであり、また職人には大工、杣大工、石工、桶屋、屋根葺、木挽などがあった。特に、このマチがきわめて都市性を有していると思われるのは、彦山役者と称された芸能集団が常時居住していたことである。

天明二年（一七八二）に豊前に来た古河古松軒の『西遊雑記』によれば、町屋は百軒余もあって酒造屋、八百屋など山中にはめずらしく何でも揃っている、と記し、また享和二年（一八〇二）に尾張の菱屋平七が著わした『彦山紀行』にも、彦山町には人家が百軒あり、商家、造酒屋などがあって、この造酒屋の家に宿泊した、と記されている。

彦山の最大の祭礼は二月二五日の「松会正日」という行事で、これは釈迦の命日にちなみ、衆徒による「涅槃会」が大講堂で行われ、また講堂広庭では「松会神事」があって、稲の豊作を祈願する御田祭と神輿の渡御、獅子舞、武芸、延年、風流、柱松の神事などの一連の行事が次々と繰り広げられる。そしてこの時には周辺の農村から多くの信者が、参詣に訪れたもので、一つの坊に数十人が宿泊していることから、通常の数倍の人で一山が埋まったと考えられる。

すなわち、この彦山でも行事の中心は講堂であり、講堂はまさに一山の広場であった。

彦山の産物には鍛冶炭や杉材の他に、染色の材料である茜草、漢方薬のブクリョウ（茯苓）、茶、蓼、陶器、和紙、刀剣、皮革などがあり、ここにも修験道の知識というか技術が反映しているように感じられる。

さらに、このような一山の空間構造を見ると、ここでも霊仙寺講堂を中心とした宗教施設ゾーン、坊舎とその一角を占める日常生活ゾーン、そして僧侶や山伏たちの墓所ともいうべき霊園ゾーンの三つの地域というかゾーニングが明確に区分されていることにも注意される。

こうした山中の繁栄は文久三年（一八六三）に小倉藩が兵を彦山におくり、占拠した後は、次第に衰退したものであった。[38]

㈣　八塔寺

岡山県と兵庫県の県境付近に位置する和気郡吉永町には、古く九世紀の平安時代初期頃から、熊山を基点に天台系の密教道場が開かれていた。

そして同じ頃、真言宗の教線も拡大し、天台・真言宗両派は互いに競いあいながら、熊山からさらに東備、美作地方に北上したもので、その一つが加賀美の天台系山岳道場の八塔寺山である。しかし、この八塔寺は平安末期には真言系道場に変わったとされ、すなわちこれは高野修験者（聖）の影響によるものといわれている。

この八塔寺が最も栄えたのは鎌倉時代であり、その当時は八院六四坊の計七二カ寺があったとされ、その堂塔が、標高五三八メートルの行者山（堂山）の山麓にひしめき建っていたという。

今日、この八塔寺の堂塔は廃絶して見る影もなく、現在その発掘調査が進められているが、小字地名には往時の名残をとどめるものが多く、例えば「大町」「木屋」「漆場」「枠立」「細倉」「鹿白」「屋敷」「けわい坂（化粧）」といった地名が注目される。

また寺院名とみられる「八塔寺」「本堂屋敷」「善院」「徳院」「三宝院」「若院屋敷」「法潤坊」「大善坊」「東南坊」「浄徳坊」「龍徳坊」「久保寺前」などがあり、また「大門」「古塔」「客殿の西」「五重塔跡」「鐘撞堂」「書院」「塔屋敷」「仮堂屋敷」などといった寺院施設の痕跡を示す地名、さらに「長泉町」といったマチの痕跡を残す地名などがあって、ここには中世鎌倉期に繁栄した山岳寺院都市の姿を偲ばせているが、残念ながら八塔寺の場合、その実態については不明確な点が多い。(39)

いずれにしろ、ここにいくつかあげた事例は、かつて古代末期から中世、近世初期にいたる間、わが国の山岳地帯における密教および旧仏教系の山岳寺院を中心とした山地都市であった。

これらの山地都市の性格を考えてみると、まず第一に、それはある時代の一定期間のみ繁栄したものであって、後にことごとく廃絶したか、あるいは衰退しており、今日それを詳細に検証することは不可能な状況にある。

第二に、それは人里から離れ、隔絶した山地空間のなかにつくられた宗教施設であり、山地周辺の様々な職種の人々の信仰を広く集めている。すなわち民衆宗教を主体とした性格が強いとみられる。

第三に、きわめて都市的な装置を施した日本的な広場空間を展開したものであって、朱色のような目立つ色彩の建築物、人を驚かせるような造形物など参詣者が喜びそうな名所をつくりあげ、ある種の遊興空間を演出している。

第四に、そこでは一山に必要な生活物資や製品を生産する様々な職人や商人を内部に抱えており、自活できる生活空間をつくっている。

以上のような性格を考慮してみると、ここにはある意味での自己完結的な社会体制が確立しており、独自の協同体というか、日本独自の都市構造の原像が隠されているように考えられる。

五　「尾山」と称した金沢の山地都市的コスモロジー

かつて中世末期の文明三年（一四七一）に一向宗（浄土真宗）の北陸における布教の前進基地として創建された金沢御堂、すなわち尾山御坊の寺内町として発達した都市金沢は、その後、加賀一向一揆の政庁とし

て一〇〇年間、「百姓の持ちたる国」という文字通りのコミューン社会の中心地となった。

さらに天正一一年(一五八三)、前田利家がこの金沢御堂の城郭に入ったのち、金沢のマチは本格的な城下町に改造されたといわれている。

ちなみに、利家が金沢に入城したときのことの伝承を記録した『越登賀三州志』によれば、当時の金沢は茅葺き屋根の農家が疎らに散在していたもので、およそマチらしい景観がなかったことを記している。[40]

もともと加賀地方の民家は、基本的には妻入りの構造をもっており、この地方は冬季にそうとうの積雪があるところから、屋根に降り積もった雪を放置する空間、あるいは除雪のための空間を要するので、隣家との間は充分にとらねばならなかった。

したがって、当時の寺内町といっても、今日我々がイメージしている家並がつづいた通りのマチという感覚からは、かなりズレがあるように思われる。

周知のとおり加賀一向宗の道場であった「金沢御堂」は、現在も残る金沢城内の一角にあったと比定されているが、これは犀川と浅野川という二本の大きな河川に挟まれた小立野台地の、平野部に面した端っこにつくられた天然の要害地である。

一説にはこの寺郭が小立野という台地の鼻につくられているので、その山の尾の意味から「尾山」という町名がつけられたと言われている。

加賀藩の江戸時代の伝承記録である前述の『越登賀三州志』あるいは『加能越金砂子』、『亀の尾の記』といった文献に記載された、「金沢御堂」とその周辺の寺内町の様子は、おおよそ次のようなものである。

まず、最初に若松にあった一向宗の道場を小立野に移し、それは「本源寺」と称され、別に「御山」とも呼ばれていた。その後、近世の金沢城内でも一番高い場所であった本丸付近に「金沢御堂」が建立されたらしく、ちなみに佐久間盛政および前田利家の入城後も残っていた本堂の阿弥陀如来は、さらに利家夫人の芳春院によって安置され、夫人の死後は照円寺に引き取られたとされている。そして、この本丸とその下の二の丸との間にある空堀には朱色に塗られた「極楽橋」とよばれる橋が今日でも残っている。またその他の金沢御堂時代に建てられたいくつかの建物は、後に加賀藩の建物としても使われたらしく、例えば作業所は「塔司」の残りであるといい、また下台所、割場、会所といった建物も御堂の頃の「支院」の建物であるとしている。いずれにしろ、この山内には本堂を中心とした仏殿、寺を守る坊官の武将の館、堂衆の支院といった宗教施設に加えて商人や職人が住まうマチが同居してあったもので、まさに寺内町の形をなしていた。

なお、金沢の都市のトポロジー論については、筆者が先に著した『都市民俗学』の「第二章　都市のコスモロジー」にて、「金沢御堂」と風水思想などにもふれながら詳述しているので、参照されたい。[41]

そしてここで特に注目するのは、「金沢」という地名が本来もっている山地民的性格、換言すれば山地的世界観とも呼べるべき都市性の問題が、考えられるからである。

前述したように、日本の城下町には種々の形態があるが、その多くは

軍略的な意図のもとで領主が居住する天守閣を中心に城郭が築かれていて、織田信長がつくった安土城の巨大な天守閣などは、まさに信長の天下統一の意志を明確に示したものといわれている。

そして、このような戦国期に築城された城下は「山下（さんげ）」とも称され、このような城および天守閣が屹立する契機として、領主は権威をもって天下の人心を奪うという心理的効果をねらったものとされている。[42]

また、城下を山下と呼ぶと同時に城郭そのものを「御山」と称していることから、城郭はもともと山城を期限とし、国を統治し易い平地に移っても、なお人々にとっては下から見上げる領主の館のイメージは拭えなかったのであろう。

そこで、もう一つ注意されるのは、この場合の「御山」の呼称には地方の有力寺院の俗称と重なる部分があり、さらには地方で信仰を集める霊山の呼称においても重なっている点である。

総じて日本の仏教寺院はそのルーツを中国の寺院にもとめるという慣習から、例え平地に位置する寺院であっても寺院名には必ず山号が付けられているが、北陸の場合、一向宗布教の折に、どちらかと言えば山地に道場を開いて、山地民を対象に教線を拡大した傾向があって、先の山岳寺院と同様にこの山地との関わりは当初から深かったと思われる。

すなわち「金沢御堂」が建立される以前に、一向宗の中興の祖ともいう蓮如が北陸布教の道場として開いた、越前と加賀の国境に位置する吉崎御坊を「御山」と俗に称していたことによって示される。また加賀地方では、祖霊の鎮まる山としての神体山である白山を「御山」と称していた形跡もあり、『白山宮荘厳講中記録』にはそのような記載がなされている。

いずれにしろ、金沢城下町が周囲の民百姓からオヤマの呼称で呼ばれたのも、もともと「金沢御堂」自体が「御山」と称されていたからであり、当初から有力寺院を崇敬した呼び名を継承してきたのにすぎなかったからではなかろうか。

このことについては、前述した拙著『都市民俗学』にも触れてあり、また井上鋭夫の『一向一揆の研究』および『山の民・川の民』、さらに浅香年木の『小松本覚寺史』などにおいて詳しいので、ここではこれ以上触れないが、初期の一向宗を信仰する山地民にとって、「御山」の呼称は重要な教団の心の支えであった。[43]

この一向宗徒と「金沢御堂」との関わりについては、御堂の創建に対して坊舎の建設費用の多くを寄進をしたのは金屋、紺屋、造り酒屋（醸造業）、行商人といった一向宗門徒の有力な人々であったと言われている。[44]

そして、彼らの多くは一向一揆の民衆側のオルガナイザー的存在であり、筆者はその背景として、彼らが冶金技術とか醗酵技術といった化学的知識と技術を保有する、当時としてはきわめて知的な職能集団であったことに起因していると考えている。[45]

さらに敢えて言えば、この「金沢御堂」の立地条件として、当時は河川の治水もままならぬ時代であったことから、常に河川は氾濫し、その

写真 1　高野・丹生明神社　朱色に塗られた社殿が目立つ。

写真 2　金堂（講堂）　現在の建物は昭和 7 年に再建。

写真3　山域内のあちこちに設置されている案内図、八葉蓮華の景観を表わす。

写真4　高野山　日常生活ゾーン

写真 5　高野山　奥ノ院付近の霊園ゾーン

写真 6　全国から参詣に訪れた信者ならびに観光客。

写真7　参詣社の多くは白裳束に身を包む。

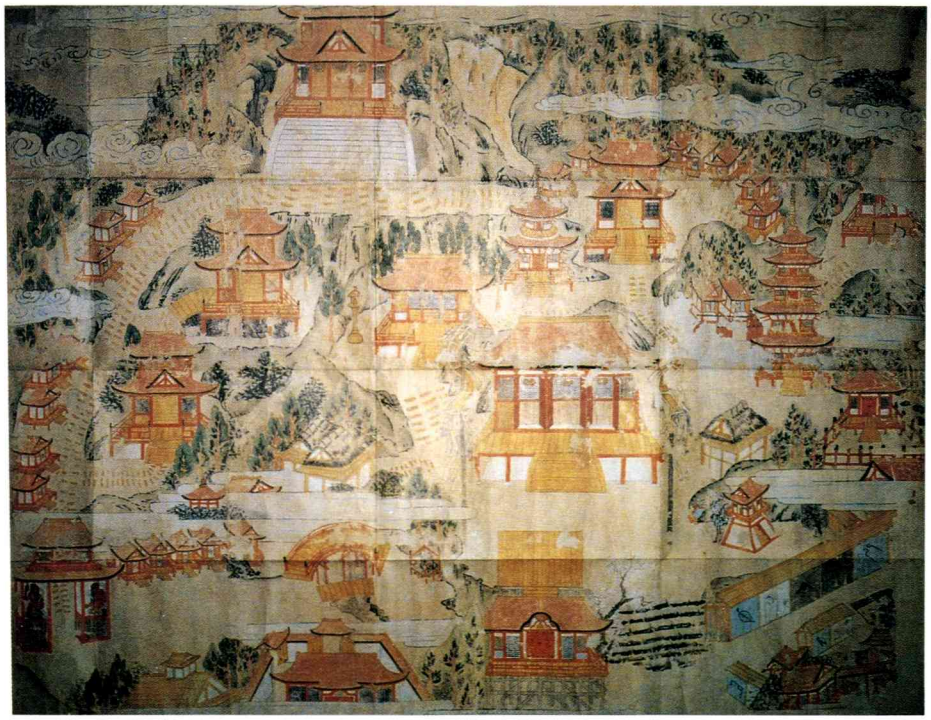

写真8　石動山境内古絵図　室町期の盛時の様子を伝える。
（『鹿島町史』石動山資料編付図より）

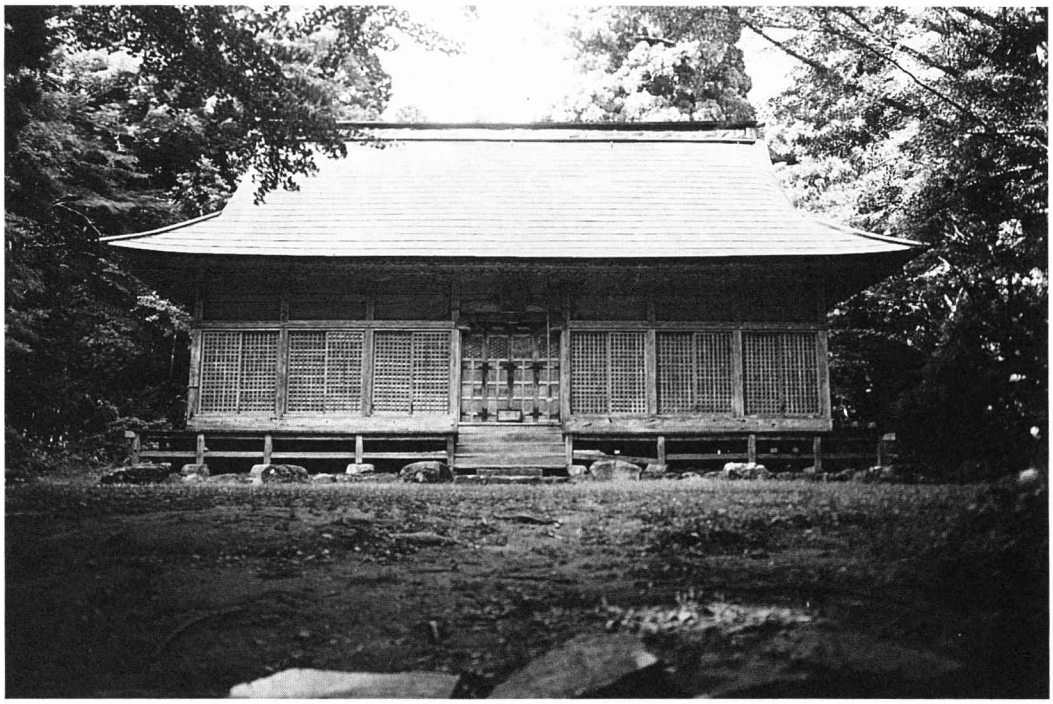

写真 9　伊須流岐比古神社社殿、旧神輿堂の建物

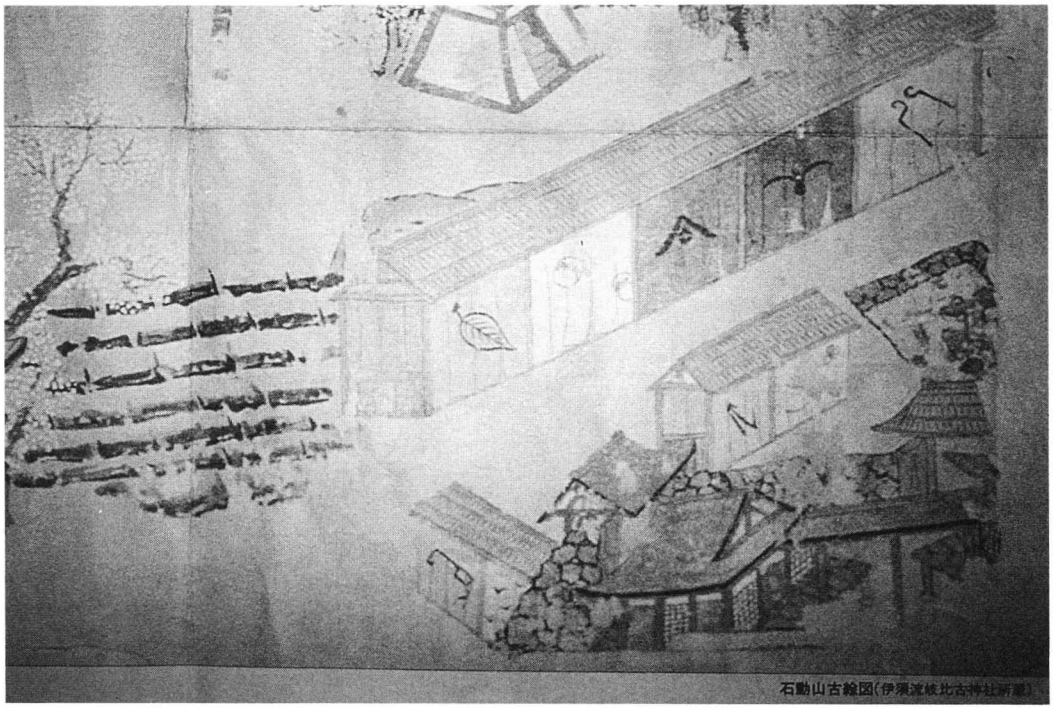

写真10　マチヤドウリの拡大部分　石動山古絵図（伊須流岐比古神社所蔵）

写真11　高野山　奥ノ院前の土産品売場　高野槙が売られている。

写真12　高野山町内の薬屋看板

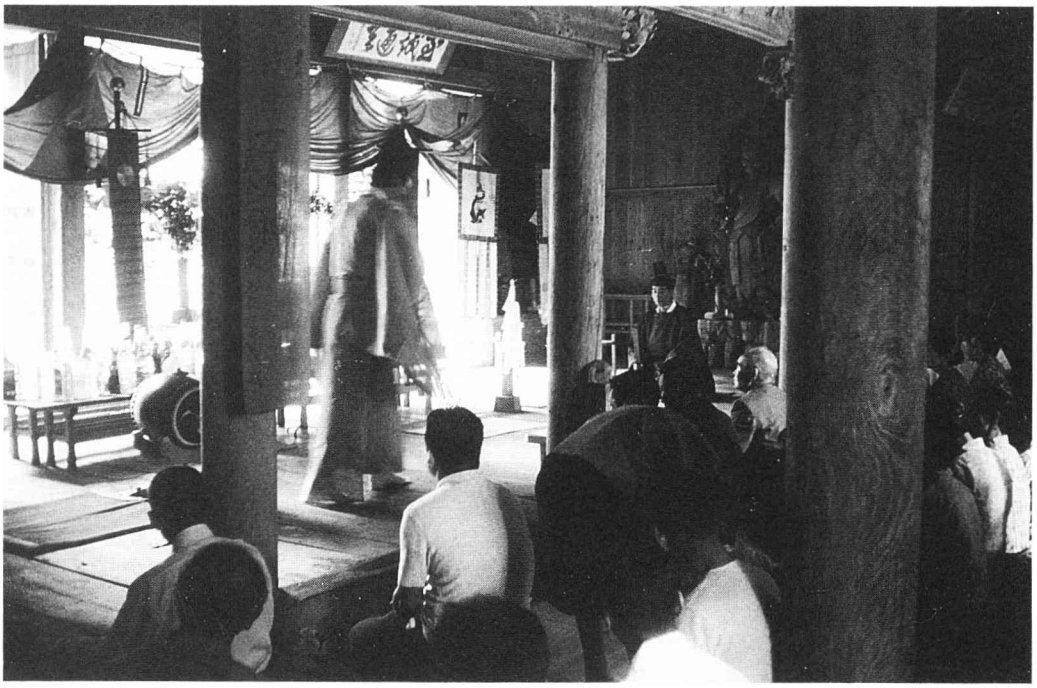

写真13　七月七日の石動山開山祭の神事（昭和47年撮影）

写真14　石動山開山祭に集った信者（昭和47年撮影）

流域は稲作の耕地として余り良い条件の土地でなかったこと、またこの河川そのものが河北郡と石川郡の郡境であって、このような地境は支配者側にとって、管理的にはきわめて曖昧な土地であることなどの理由によって、寧ろこの不利な条件を積極的に利用し、御堂を設置した可能性がある。

金沢の城下町研究に長年携わっている歴史家の田中喜男によれば、かつて砂金の採掘に関係した金屋集団が、犀川流域の河岸段丘の土の中から砂金を発見したことによって、この場所に居住するようになったと推察しており、古くから金の鉱物資源とそれに関わる職能集団が、金沢の地名発祥の背景にあることを指摘している。(46)

ここで気になるのは金沢の地名由来譚となっている芋堀藤五郎伝説である。

ちなみに金沢の地名由来譚である芋堀藤五郎伝説について、江戸末期に記された『越登賀三州志』来因概覧附録巻の一には「金城名号来因」として次のように記されている。

「相伝ふ。古へ当国石川郡山科村に藤五郎と号せる道人あり。加賀介藤原吉信の末裔なりと云ふ。薯蕷を掘採り、之を市に鬻ぎて一身の生計となすゆゑ、時人芋堀藤五郎と呼ぶ。為人寡欲にして奢らず。家に四壁なく、衝門三尺に盈たざれども、蔬食を甘んじて心晏如たり。義皇上の人の風致あり。爰に和州初瀬里に生玉右近万信と云巨富の人あり。居恒子なきを恨んで、長谷の観世音に祈り、一女子を産することを得たり。其の女美にして艶也。名を和五と呼ぶ。破爪の年に至れば、右近其の婿を択ぶに、一夜観世音夢裡に示現して宣ふ。彼が女婿となる者は加州の芋堀藤五郎也と。右近夫婦即ち仏告に随ひ、巨万の財宝を従者に荷担せしめ和五を携へて、遥々藤五郎の家に到るに、纔(わずか)に容膝の小廬也。然れども仏告に背かず、藤五郎に此の旨を謀る。藤五郎元より之を辞すといへども、固く乞うて之に嫁せしめて右近夫婦は帰国せるが、長谷の観音は守本尊なれば、和五其の像を恒に懐にし、夫に仕へて貞節の令聞あり。藤五郎奢を憎めば其財宝を近郷の貧民に尽く分与し、其の身は愈々薯蕷を掘りて食ふのみ也。或日、右近の方より沙金一包を贈るに、藤五郎之を腰に夾みて山に行き、田の雁を見て之を投げつけて帰る。和五其のことを聞き驚きて云ふ。過大の沙金一朝にして抛つこと其の故いかにと、藤五郎笑ひて云ふ。沙金は我が薯蕷を掘るの地に多し。何ぞ之を惜しまん。取り皈り与えんと。明日齋し来ること若干也。其の沙金を洗ひし沢を後に金洗沢と称す。即ち今学校境中の金沢是也と云ふ。又某年除夜、山間より黄・白・黒の三犢来り、藤五郎が衝門を窺ふ。元旦門を開くに金・銀・鉄の三塊あり。藤五郎之を以て弥陀・薬師の二像を鋳さしめて安置す。其の弥陀は今の百姓町慶覚寺の本尊是也と云ふ。薬師は今の寺町伏見寺本尊是也と云ふ。和五が懐にせし守本尊の観音は、今の卯辰観音院の本尊是也と云ふ。又其の三犢の来りし方の山を、後世三小牛と号すとなり。藤五郎廉直なるを以て隣郷其徳に懐き推して地頭となす。藤五郎夫婦他の望なし。常に和歌を詠じて其の志を頤ぶと云ひ伝ふれども一首の世に存するなし。夫婦死して寺地山の麓に葬る。其の墳を二五墳と云ふ。藤五・和五を併せ名づくるならん。今猶存す。此の由来年号も

不詳。誠に村嫗の絮談に類すといへども、今に至るまで通国の人口にいひ伝ふる所なり。蓋し寡欲廉直の天寵是の如きの奇幸あることは、和漢挙げて算す可からず。されば之を金沢地名起源の典故に具へんも、亦可なれべし。[47]」

この芋堀藤五郎伝説のなかで特に問題となるのは、一つは「金洗沢」と記された湧き水のことであり、これは現在、金沢城に隣接する兼六園の東端にあって今もこんこんと湧き出で、藤五郎が砂金を洗った泉にて「金城霊沢」と説明されている。

この「金洗沢」は、これから奥に伸びる小立野台地の末端付近にあたり、ここからさらに兼六園や金沢城内の丘陵地が伸びているが、現在遺跡として残る城内の本丸、二の丸御殿跡の井戸からは、ほとんど水は湧いていない。

これは城郭を築く際、内堀をつくる目的で台地を切ったために、地下水脈を遮断したことに起因しているとみられ、また一説には現在の兼六園のほぼ中程に地質的に犀川断層と呼ばれる亀裂があって、これが台地の地下水脈を遮断しているとも言われている。

いずれにしろ、城内はそこに立て籠もるにしろ、飲料水を確保するにはまったく不適な地勢であって、江戸初期の寛永九年（一六三二）に加賀藩はいちはやく、この小立野台地奥の犀川上流域に面した辰己村を取水口とする、「辰己上水」と呼ぶ約一二キロの道程でトンネルを駆使した上水道工事を行って、城内に飲料水を引き入れている。ちなみに『越登賀三州志』の記録では、それ以前の文禄元年（一五九二）には地底に陰樋を設けて水道を引き、これより「尾山」を改めて「金沢」と号すと記しているように、上水道は都市を形成するために必要な設備であったことをここでは強調している。[48]

従って筆者は、若松の道場を小立野に移したとされる最初の道場を建立したときには、まず水源のある場所を基準に土地を選んだもので、この「金洗沢」付近が伝説を含めて最もふさわしい場所ではなかろうかと考えている。そして、「金沢御堂」が建設される以前は、むしろこの台地下の山麓に紺屋とか酒屋などの水を必要とする職人や商人が居住し、また鋳物などを生産する金屋の人々がもともといたのではないかと考えられる。

いづれにしろ飲料水と都市生成過程との関係は重要な因果関係にある。

さらにこの芋堀藤五郎伝説におけるもう一つの問題は、山間より黄・白・黒の三匹の牛が来て、翌朝には門前に金・銀・鉄の塊が置かれてあり、これでもって弥陀・薬師の二像を鋳造し、また長谷の観音を祀ったと記していることである。

すなわち、ここにはまさに冶金技術や鋳造技術、あるいは鍍金技術のあったことが象徴的に語られていて、その背景には何らかのこれらの技術を保有していた密教系文化の痕跡を感じさせる。

ちなみに、この三つの牛に関する伝承地は、現在、金沢の中心部からみて南方の前田家墓地などがある野田山に隣接した三小牛山の地名に比定される場所である。

そしてこの三小牛山では、近年、金沢市教育委員会の手で「三小牛ハ

バ遺跡」と称された建物群跡が発見された。

その遺跡調査の報告によると、ここにはいくつかの堀立て柱の建物跡があり、遺物には「三千寺」と記された墨書土器や木簡、銅板鋳出如来立像などが出土し、奈良時代に既にこの辺りにあったと文献上にみる三千寺跡であることが判明した。

そしてこの三小牛ハバ遺跡のすぐ近くには、昭和三二年頃に発見されたという「さこ山遺跡」があり、ここからは七〇八年頃に鋳造されたという銅銭の和銅開珎約五八〇枚が出土したもので、従ってこれらの遺跡群は、この辺りを治めていた道君が全盛を誇った奈良時代に、高句麗以来の大陸との対岸交流の中で伝わったという「道教」の影響を、色濃く反映した山林寺院ではなかったかと考古学研究者は推定している。(49)

すなわち、ここでは早くから、大陸の先端技術を保有した道教の知識を導入した仏教寺院が存在し、それはある意味では修験道的性格の山林寺院であったことを物語っており、さらに金・銀・鉄などの鋳造技術をもった金属技術者集団をともなっていた可能性をも示している。

ここでもう一度わが国の修験道の歴史をふりかえってみると、奈良時代後期以降に大和の葛城山と金峯山を開いたとされる役行者すなわち役小角（えんのおつぬ）によって、修験道は始まったもので、しかも彼は山林修行を行う仏徒であり、山の呪術者であった。

和歌森太郎の『修験道史研究』によると、奈良時代の特に天平の頃は『風土記』的知識と相まって、天然資源の開発が進み、鉱産物への関心が高まり、金属文化への志向も強まった時である。そんな頃、大和の吉野の山中は水分山としての農民の信仰を集めており、また中国の神仙思想の影響もあって吉野の山は理想卿のように映り、いつしかここは金の山地ではないかとされ、「金の御嶽」と称されるようになったという。従って、このようなかたちで注目された山には、既に著名となっていた役小角が関係するのは当然のこととされ、奈良後期の山岳信仰界にあって金峯山の地位はきわめて高められ、そしてこの黄金まばゆい金峯山には神仙がいるという道教的観念は、その性質上既に密教の中にも含まれていたという。(50)

すなわち、修験道発展の初期段階では必ずしも金鉱山に直接関わってはいなかったけれど、いつしか道教の知識を学んだり、後に最澄や空海によって唐から科学技術などが導入されるようになると、彼らの修行場である山岳地帯の資源を積極的に利用するようになったと考えられる。それは鉱物資源のみならず薬草などにも及んでいる。

ちなみに、前述した内藤正敏は、わが国には山伏が金属技術者であって鉱山を開発したり、鋳物や鍛冶を行った例が多いことを指摘している。

なかでも、東北の岩手県の水沢にある羽黒山には、出羽の羽黒権現が勧請されており、その御神体は鉄で鋳造された弥陀、薬師、観音の三尊仏であるという。また同じく岩手県遠野の早池峰山修験も金属・鉱山技術者集団であったとされ、早池峰山の登拝道の一つである稗貫側には、藤蔵と兵太郎の二人を開山とし、その兵太郎の子孫が代々神主を務めた田中神社が大迫町金沢にあって、ここでは近年まで、文字通り砂金堀りが行われていたという。さらに、鹿児島の芹ヶ野金山はむかし島津の殿

様が金峰山の神様に黄金を与えてくれるように祈願したところ、神は牛の姿に化身して、金の鉱脈を教えたと伝えており、この金峰山の山頂には、明治の神仏分離まで蔵王権現堂があって、麓の金蔵院という修験が別当をしていたと記述しており、これらの伝承は、前述の芋堀藤五郎の伝説の内容と実によく似ている。[51]

ちなみに、金沢の三小牛にあった山林寺院の三千寺から、約一キロ程離れた山中には、現在も「黒壁山権現」と称され、天台系の山伏によって営まれた寺がある。すなわちここは、いわゆる古くからの修験道の行場であったらしく、寺の下を流れる伏見川の川沿いには岩場があり、その中程に泰澄大師の像を祀った洞穴があることで知られていた。そして、ここには利家が金沢城に入城した際に、城内の魔性のもの（一向一揆の指導者たちの怨霊か）をこの黒壁山に追い、封じこめたため、古くには市中の人々から「魔所」と呼ばれ恐れられていた。[52]

いづれにしろ、この辺りは密教や修験道文化の色濃い場所と考えられるが、近世初期の城下町のことを記した『加越能金砂子』をみると、その頃かなりの真言宗寺院、山伏のあったことが窺える。例えば古寺町の山伏、寶幢寺（後に小立野に所替え）、諏訪社の別当理證院、祇園牛頭天王社の別当山伏願行寺、稲荷社の真長寺、八幡社の波着寺、永久寺、摩利支天尊社の寶泉坊、愛后山勝軍地蔵の明王院、久保市乙剣社の法住坊、伏見寺、遍照寺、寶集寺などがあり、これらは加賀藩の寺社奉行の所替によって泉野寺町、卯辰寺町、小立野端に集められた寺院であった。

また、『越登賀三州志』には元和四年（一六一八）に陀羅尼鍛冶の六蔵という者が、金沢山崎町田上屋弥右衛門妻と姦通し、泉野にて釜刑に処せられたというのがあり、ここにも密教的な工人集団の存在を感じさせる。

以上のように、金沢の都市成立の背景には、この土地にもとからある金属工人集団の存在が垣間見えてくるのであって、その技術の系譜においても、修験道あるいは密教といった旧仏教が展開した山岳寺院の影響があることを感じさせている。

そして、かつて「御山」と呼ばれた寺内町とその後の城下町形成には、それ以前の山地民社会が、例えば山地都市で描いたような、宗教的コスモロジーに基づく現実表現として、そこには様々な山地の職能集団を組み込んだ都市づくりの構想があったように考えられる。

例えば金沢の紺屋の発祥には、加賀馬場である白山比咩神社が、往時かかえていた水引神人の末裔である可能性が高いこと、あるいは金沢漆器をつくる蒔絵師や塗師屋、木地師などは、かつて毎年旧暦の一二月一三日に虚空蔵菩薩を祀る寺院にてコクソ祭りをやっていたなどの事例からも、都市と山地民との関わりがよく示されている。[53]

さらに言えば、ある種の寺院都市（寺内町）には、山地を出自とする者が多く、また本山参りの参詣者を数多く集めてきたところから、さまざまな参詣者のための施設や装置、仕掛けがつくられ、そこに広場性をもった都市的要素をみることができる。

また、金沢御堂の寺内町というか初期城下町の都市空間ゾーンを考慮してみると、道場を中心とした諸堂宇の建物群は宗教施設ゾーンであり、

これは後に大名の館に変えられている。そして、それをとりまく僧侶の生活拠点である坊舎と多くの職人や商人の住むマチ域の日常生活ゾーンがあり、これも後に大名の側近武士の屋敷地に変えられている。この場合、やはり近世に入ると職人や商人のマチ域は城からやや遠ざけられていて、近世初頭の本格的な城下町形成が始まると、これらのマチ域はより明確に区分されていった。

そして、台地端に位置する御堂および後の城郭から、その台地上の奥は小立野と称され、本来は魑魅魍魎が徘徊する正に「野」の空間であったが、祖霊の鎮まる山である白山に近いところから、そこは以前は霊園空間であった可能性がある。すなわち、現小立野の石引二丁目（白山町）には早くから白山を主神とする天台系寺院の波着寺があり、またその台地麓には同じく白山信仰と関係した曹洞宗本山の大乗寺（近世初期にさらに南に移動）があり、さらに前田家三代目の当主利常の正室であった天徳院の菩提寺が近世初頭に造られているなど、初期の城下町においては祖霊を祀る霊園ゾーンであった。（図5を参照）

従って、一向一揆の頃より形成された金沢寺内町、および前田利家入城後に形成された大名城下町は、基本的には山地都市に見られるゾーニングを踏襲してきたのではないかと考えられるのである。

六　若干の考察

旧東海道の要衝、静岡県磐田市見付の一の谷は中世墳墓群の遺跡として知られ、近年この遺跡の性格と中世都市との関係を論じるシンポジューム記録が刊行された。[54]

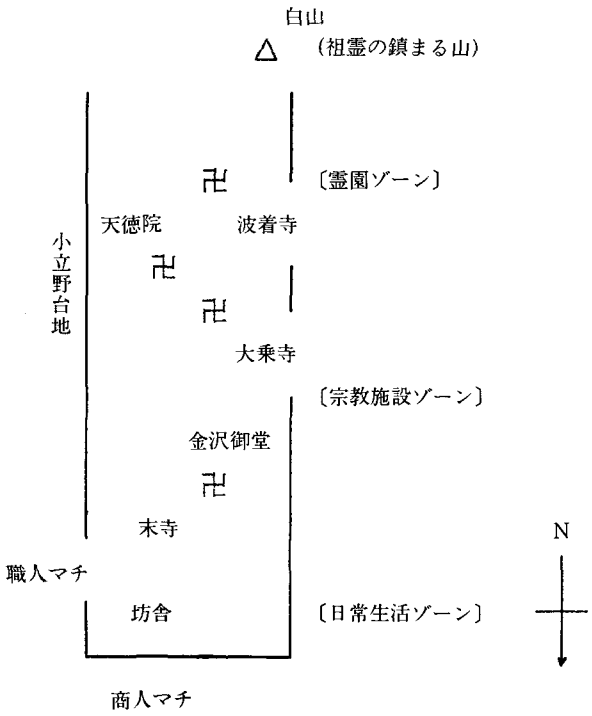

図5　初期金沢の都市概念図

そのなかで、この論文のテーマに関係していると思われる箇所を拾いあげながら、多少とも私見を述べてみたい。

まず、網野善彦は「中世都市と場の問題をめぐって」のなかで、日本の中世都市の形成に当たって、河・海を通じての交通が重要な意味を持っており、都市の住民が多様な意味で海民的な性格を濃厚に持っていると述べている。勿論、中世都市の成立と展開といった視点では、中世における海上交通と交易の発達は重要な要因であることは否めない事実であろう。だがしかし、筆者がこれまで指摘してきた山地都市が持つところ

の都市生成の条件については、どのように位置づけるべきだろうか。むしろ非農業民という点では共通するものの、都市の原初形態として山地都市を捉えた場合には、中世に始まったある一定時期のみの都市生成の原理とは別に、もっと根源的な都市生成原理が別にあるように考えられる。

また、網野善彦は近世城下町と異なり、自然成長的な特質の強い中世都市の場合、どこに市庭が立ち、町屋が建てられ、またどこに寺院、神社があり、聖地―墓所があるかについては、社会の長い慣習が作用しているはずであり、こうした「場」に対する感覚は、近世以降の常識で考え及ばないものがあると述べていて、このような指摘は重要であると考えられる。[55]

すなわち、筆者が示した高野山および石動山におけるゾーニングは、当時の社会的慣習に裏打ちされた「場」の感覚を表示したものと思う。

この見付のマチに関するデータを見るかぎり、注目されるのは総社を中心とした宗教施設ゾーンと旧東海道沿いにマチ並みを形成する日常生活ゾーン、そして一の谷の丘に群集する墳墓のある霊園ゾーンの三つのゾーンの組合せである。

この宗教施設ゾーンについては、台地端に位置すると遠江国の惣社である延喜式内の淡海国玉神社をはじめ、見付天神社(矢奈比売社)、あるいは多少離れてはいるが国分寺や府八幡宮などの古社があり、また、このシンポジューム参加者である石井進の見解では、古寺は中世以前の開創を伝えるものが、今は廃寺となったものを含めて一〇カ寺以上あるとされ、鎌倉中期の弘安年間頃まで真言または天台宗の寺院であった省光寺、西光寺、蓮光寺の三カ寺は、この見付を訪れた一遍によって時宗に改宗したものであると述べている。

すなわち、この見付には時代の盛衰をともなった三つの宗教施設ゾーンがあったと考えられる。

そして日常生活ゾーンとしては、石井進によれば近世においては旧東海道の街道に面した宿駅を中心としたマチ並みを形成しているが、それ以前は古代末期の惣社と関係した国府政庁と中世における守護所といった官庁が置かれ、守護所は見付端城の地であったと考えられている。従って、その在庁官人が住まうマチ、さらにその生活を支える商人や職人のマチが、この端城の周辺にあったと考えられている。[56]

さらに典型的な中世の霊園ゾーンと目される「一の谷墓地」は近世初期まで機能しており、このマチの西北部の一画を占めていた。この見付の歴史的復元の空間配置に関して石井は「中世都市のコスモロジー」につながる感覚と表現している。(図6を参照)

以上のように、見付は海辺に近い都市ではありながら、台地上に展開する都市ゾーニングとしては、いわゆる山地都市の空間構造を基本的には踏襲しているものと考えられる。ただ宗教施設ゾーンについては分散しているもので、この点については一山を明確にゾーニングしている山岳寺院都市とは異なるが、化粧坂といった名称には修験道文化を感じさせるものがある。また、町屋を構成している人々がどのような職業なのかは不明なので、いまひとつ都市論としては充分に展開できない。

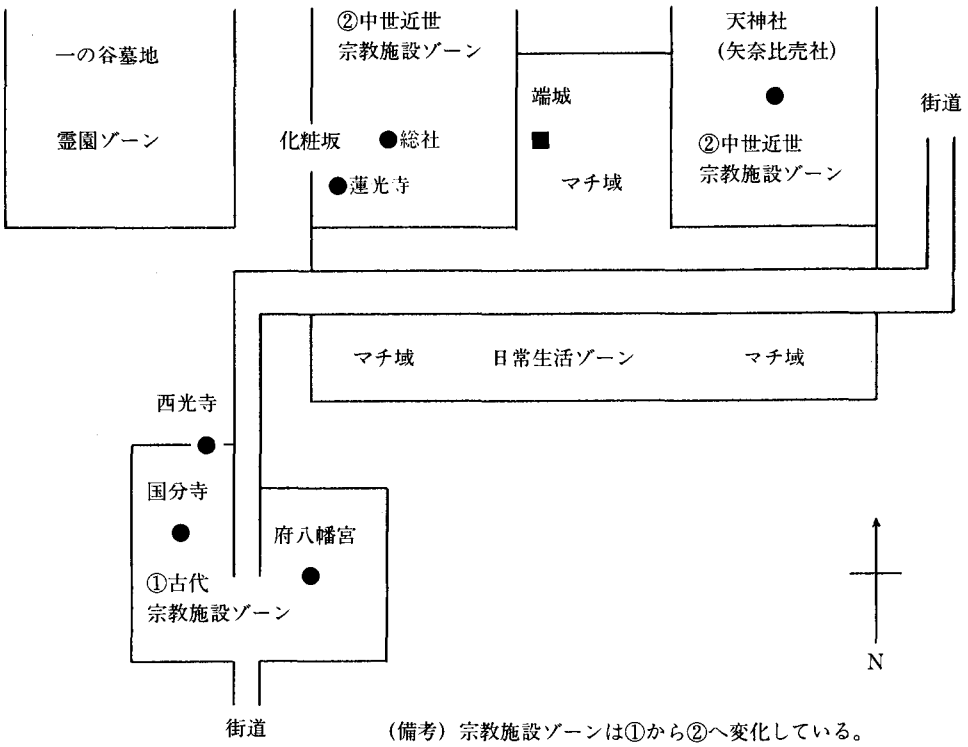

図6　磐田市見付の都市概念図

ちなみに新谷尚紀は、一の谷墓地が中世の終わりに突如として廃絶した理由として、一の谷墓地は見付の府中域の外に設けられていたのであり、近世になると寺の境内に墓地が設けられ、それは町の人と寺との緊密な関係ができたためとする。すなわち平安京の例から足利将軍や山門などの権門体制の崩壊によって、新たな経済基盤を求める寺院側の動きと、その寺院内に墓地を求める町衆側の要求とが、触穢思想の弛緩の中でたがいに結びついて、境内墓地が成立したとしている。また、マチの西北方向に墓地がある理由についても、西北が長い間大念仏の集団が訪れ来る忌むべきいわば死者＝祖霊の方角に対応しているとしている。[57]

従って、中世のマチ（都市）のゾーニングおよびトポロジー的課題については、まだまだ検討の余地が多く、さまざまな理由を見出していかなければならないであろう。

いずれにしろ、ここでは先の尾山と称した金沢の都市空間構造のように、平地においても山地都市構造が展開されている事例として、この見付のマチは一つのモデルになるものと考えられる。

すなわち山地における寺院都市における講堂は、都市全体におけるシンボル的存在であり、一定の宗教に集約されているという枠組みがあるにせよ、その宗教集団社会全体にとってのパブリックな場所なのである。

従って、筆者の私見を述べれば、日本には西洋でいうところの広場といったものはほとんど見当たらないが、高野山などのような山地都市に類似の広場観のようなものを発見することができると考えられる。

なぜなら、このような山地宗教都市がもつ都市性には、例えば絶えず

参詣者などの旅行者を集め、そのような滞在者の人口によって居住人口の二倍以上の人々が居留し、しかも出入りを激しくし、さらにそれらの人々を受け入れる様々な施設や物見遊山のための装置や仕掛けが随所につくられ人々を享楽の世界に誘うなど、現代の日本の都市社会の条件に通じる要素を数多く内包していることから、都市自体が広場であるといった観をいだかせるものがある。しかも、その背景には密教や修験道が基本的にもつ多様性、あるいは中沢新一がいみじくも指摘したように「都市と資本主義を形成する運動性」が隠されており、それは一方で山の資源を駆使した様々な技術の集積による文化のイニシアチブにも繋がっており、そのことが時代のなかで人々を魅了したものと考えられる。

そして、このような山地的思考は、講堂といった具体的な施設はともかくとして、近世、近代に成立した城下町やその他の商業都市の都市性へと受け継がれ、日本独自の新たな都市構造の祖型を窺わせるものがあり、その意味でも中世における山地都市のモデルは重要な都市空間の原初形態といわなければならない。(58)

本論は筆者が以前に行った能登の石動山調査を通じて、長い間抱いていた「なぜ、このような山中に都市がつくられたのか」という疑問と、それを確認するために高野山を訪れた体験を契機に想起したものである。従って、それ以外のフィールド調査は行っていないので、全体としては先学諸氏の論文や調査報告書、市町村史を多く使わせていただいた。そこで、データの読み違いもあるかと思われるが、主旨としては本論のなかで何度も強調したように、「都市空間の原初形態」すなわち「山地都市の基本構造」を朧気ながらも提示したかった訳で、その意味では問題提起の論にすぎない。粗雑な展開についてはお許し願いたい。

また、本論を書くにあたって、本館教官の考古研究部吉岡康暢氏、歴史研究部水藤真氏より貴重なご意見を賜ることができた。(平成六年九月脱稿)

註

(1) 柳田國男「魂の行くへ」(定本柳田國男集　第一五巻)筑摩書房　一九六九年。

(2) 林大監修『国語大辞典　言泉』小学館　一九八六年。

(3) 牛島史彦「伝統都市の再出発―九州・熊本城下との比較を通して」(『都市と民俗研究』第六号)金沢民俗をさぐる会　一九八四年。

(4) 詳しくは拙稿「都市の祭礼と年中行事」(歴史公論九二)雄山閣出版　一九八三年。又は、拙著『都市民俗学―都市のフォークソサェティー』四章一節「都市の祭礼と年中行事」名著出版　一九九〇年を参照されたい。

(5) 田中喜男『城下町金沢』(改訂版)弘詢社　一九八三年によれば、町年寄の役目として、毎年四月の卯辰山観音院の祭礼能に際して、前日には町奉行が楽屋の下検分を行ったために町年寄りは必ず随行しなければならなかった。藩政末期になると城下に小前町人や細民が増加し、打ちこわしなどの一揆を防ぐため家柄町人の格付けが行われたなどのことが記されている。

(6) 城下町の例えば環濠なども、防御的な目的だけでなく、無秩序な都市の拡大を防止する意図もあり、マチにシマリをつけるものであったという。矢守一彦『都市図の歴史　日本編』講談社　一九七四年。

(7) 例えば国立歴史民俗博物館所蔵の『江戸図屏風』における日本橋の袂の広場、あるいは『金沢城下図屏風―浅野川口町図―』における大橋の袂の広場には、橋番所や高札などが描かれている。

(8) 前掲、矢守一彦『都市図の歴史　日本編』を参照。

(9) 川喜田二郎『ヒマラヤ・チベット・日本』白水社、一九八八年。

(10) 中沢新一『チベットのモーツァルト』せりか書房、一九八三年。
(11) 佐和隆研「金剛峯寺伽藍の草創」（山岳宗教史研究叢書三　『高野山と真言密教の研究』）名著出版、一九七六年。
(12) 五来重「高野山の山岳信仰」前掲『高野山と真言密教の研究』所収。
(13) 内藤正敏『修験道の精神宇宙―出羽三山のマンダラ思想』青弓社、一九九一年。
(14) 内藤正敏「修験道の科学と文化」（季刊『自然と文化』三八号、出羽三山と山岳信仰）日本ナショナルトラスト、一九九二年。
(15) 樋口忠彦『日本の景観―ふるさとの原型』春秋社、一九八一年。
(16) 前掲、五来重「高野山の山岳信仰」所収。
(17) 詳しくは前掲、内藤正敏『修験道の精神宇宙』および五来重編『高野山と真言密教の研究』等を参照。
(18) 前掲、佐和隆研「金剛峯寺伽藍の草創」。
(19) 日野西真定「高野山参詣曼陀羅の研究」（『尋源』第三五号所収）一九八六年。
(20) 団古矢『高野山』ナンバー出版、一九九〇年。或いは関口正之編『密教』（図説日本の仏教二）新潮社　一九八八年などを参考とした。
(21) 詳しくは、拙著『色彩のフォークロア―都市のなかの基層感覚』雄山閣出版、一九九三年を参照。
(22) 前掲、日野西真定「高野山参詣曼陀羅の研究」。
(23) 前掲、五来重「高野山の山岳信仰」。
(24) このような円形巨大柱列の遺跡は昭和五五年に発掘された金沢市郊外の新保本町チカモリ遺跡や同じく米泉遺跡などで相次いで発見され、大型竪穴住居跡とも異なるものであった。近年では群馬県、青森県でも発掘されている。
(25) 浅香年木「石動山縁起の世界」（『鹿島町史―通史編』第二章第二節）石川県鹿島郡鹿島町役場、一九八五年。
(26) 宇佐見孝「石動山と能登の人々」（前掲、『鹿島町史―通史編』第四章四節）。
(27) 伽藍建物の位置と名称については桜井甚一「造形資料」（『鹿島町史―石動山資料編』第五章）および付図の「石動山平面図」と「石動山古絵図」石川県鹿島郡鹿島町役場、一九八六年を使用した。
(28) 詳しくは天野武「石動山の民俗調査覚書」（『能登の文化財』八）一九七二年を参照。
(29) 詳しくは小林忠雄・向井英明「石動山の民俗文化」（『鹿島町史―石動山資料編』）一九八六年を参照。
(30) 前掲「石動山の民俗文化」を参照。
(31) 拙稿「石川県における仮面の民俗雑考」（『加能民俗研究』八）一九八〇年。
(32) 前掲「石動山の民俗文化」を参照。
(33) 基本的な考え方については前掲『色彩のフォークロア』を参照。
(34) 拙稿「一九三〇年前後の都市における色彩環境―色彩感覚の近代化」（『国立歴史民俗博物館研究報告六二集）一九九四年にて詳しく触れた。
(35) 主として景山春樹「三塔・九院・十六谷」（山岳宗教史研究叢書二『比叡山と天台仏教の研究』）名著出版　一九七五年より引用。
(36) 前掲「三塔・九院・十六谷」より引用。
(37) 主として上田三平『越前及若狭地方の史蹟』三秀舎　一九三三年。或いは足立尚計「白山神社―勝山市平泉町平泉寺」（『日本の神々―神社と聖地』八北陸）白水社　一九八五年より引用した。
(38) 主として佐々木哲哉「英彦山神宮―福岡県田川郡添田町英彦山」（『日本の神々―神社と聖地』一九州）白水社　一九八四年。或いは長野覚「英彦山の修験道集落とその構造」（山岳宗教史研究叢書六『山岳宗教と民間信仰の研究』）名著出版　一九七六年。或いは長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』名著出版　一九八七年より引用した。その他に中野幡能編『英彦山と九州の修験道』（山岳宗教史研究叢書一三）名著出版　一九七九年などがある。
(39) 主として吉永町史刊行委員会編『吉永町史　通史編Ⅰ』吉永町　一九九〇年より引用。
(40) 富田景周著・日置謙校訂『越登賀三州志』石川県図書館協会、一九三三年。
(41) 同上の『越登賀三州志』あるいは『加能越金砂子』一九三一年、『亀の尾の記』一九三二年、はいずれも石川県図書館協会刊行のものである。また詳しくは田中喜男「城下町の成立・変容」（『伝統都市の空間論・金沢』所収）弘詢社、一九七六年および拙著『都市民俗学―都市のフォークソサェティー』名著出版、一九九〇年があるので参照。
(42) 前掲、矢守一彦『都市図の歴史　日本編』を参照。
(43) 井上鋭夫『一向一揆の研究』吉川弘文館、一九六八年。同著『山の民・川の民―日本中世の生活と信仰』（平凡社選書六九）平凡社、一九八一年。および浅香

年木『小松本覚寺史』能登印刷出版部、一九八三年を参照されたい。

(44) 詳しくは井上・浅香の前掲書を参照。

(45) 詳しくは前掲、拙著『都市民俗学』を参照。

(46) 詳しくは前掲、田中喜男「城下町の成立・変容」を参照。

(47) 前掲、『越登賀三州志』。

(48) 城下町の上水道については江戸神田上水の次に福山城下町に建設されたとしている。青野春水「城下町の建設—福山の場合」(大石慎三郎編、地方文化の日本史六『江戸と地方文化(一)』所収)文一総合出版、一九七七年。

(49) パネルディスカッション資料「歴史放談—謎の三小牛—」石川県立歴史博物館、一九八八年開催。

(50) 和歌森太郎『修験道史研究』(東洋文庫二一一)平凡社、一九七二年。

(51) 前掲、内藤正敏『修験道の精神宇宙』。内藤氏の他に、金属民俗に関する研究には若尾五雄の著作物があるが、残念ながら筆者はまだ検証していない。

(52) 向井英明「伝統都市の民俗空間—都市の記号論」(金沢民俗をさぐる会編『都市の民俗・金沢』)国書刊行会　一九八四年に詳しい。

(53) 詳しくは前掲、拙著『都市民俗学』を参照。

(54) 網野善彦・石井進編『中世の都市と墳墓—一の谷遺跡をめぐって』日本エディタースクール出版部　一九八八年。

(55) 前掲書所収、網野善彦「中世都市と場の問題をめぐって」

(56) 前掲書所収、石井進「中世都市見付と一の谷墓地」

(57) 新谷尚紀『日本人の葬儀』紀伊國屋書店、一九九二年。

(58) 国立科学博物館の鈴木一義氏のサジェスチョンによれば、日本の近代都市の源流に鉱山町があげられるという。すなわちここにはあらゆる総合技術(科学・化学等)が集約しており、また芸能茶道などの遊興文化も発達しているからである。筆者の場合、このことは近世以降の都市の展開例として再度考証しなければならない問題としてとらえている。

(国立歴史民俗博物館　民俗研究部)

The Archetype of Urban Space : A Mountain Temple Complex and the Nature of Square (*Hiroba*)

KOBAYASHI Tadao

A work of the joint research project dealing with the *hiroba* (square) of urban space, this paper focuses on mountain temple towns to extract the archetype of the Japanese metropolis. The monastic complex at Mt. Kōya (Kōyasan), Wakayama Prefecture, is the archetypal mountain temple town. An examination of its curious spatial composition shows it to be divided into three different spaces (zones) : the main temple zone where several important temple structures are clustered ; the everyday-life, "town" (machi) zone with living quarters for priests and for the common people working to sustain the priest's livelihood ; and the cemetery zone for which Kōyasan is famous as one of the most sacred mountains in Japan.

This esoteric Buddhist temple complex, populated by some 20,000 at its peak, displayed several factors that made it a city in the contemporary sense of the term. First, the number of those living or staying there was—and still is—very large, including priests, merchants and artisans who provided for their daily needs, and many pilgrims. Second, Kōyasan had a rich stock of know-how developed through esoteric Buddhism, or rather the Shugendō (mountain religion) culture, thus promoting the advanced technology of ancient and medieval times, as reflected in social services such as those for water supply and drainage. Kōyasan also had many noted places and historic site ruins, as well as entertainment facilities and other attractions, providing excitement, local color, and a sense of the extraordinary. In addition, with many people (priests, merchants, and pilgrims) coming and going from all over the country, Kōyasan was a place where information was pooled and accumulated, another feature of a city.

Other mountain cities with a spatial composition similar to that of Kōyasan are Sekidōzan in Noto (now part of Ishikawa Prefecture) and Hikosan in northern Kyushu and Heisenji in the Echizen province (now Fukui Prefecture). The mountain city composition provided a model of zoning for castle towns at the beginning of the early-modern period. In his "Tamashii no yukue" [The Whereabouts of Souls], folklorist Yanagita Kunio, referring to Edoite's practice during the Bon festival of erecting tall lanterns to welcome the souls of ancestors, talks of the mental makeup of the urban citizens, who originally hailed from mountainous areas, and their belief that the human soul goes to the mountains after death. The present paper argues that the mountain city therefore can be seen as the origin of the urban structure of cities since the early modern period.